昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅七年三月一日発行　卅七年三月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通巻四一八号

川柳の雑誌

麻生路郎☆書

三月号

No. 418　Pensoj flugas trans la land-limon　THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社三月句会

若本多久志氏帰日歓迎記念

★千日前の会場が大好評です。多久志氏のスライドと8ミリでハワイが一と目。

日時　三月七日（水）午後六時

会場　自安寺（（211）・四七八番）
大阪市南区千日前电停東入ル北側

兼題　「内気」（二句）麻生路郎選
（路郎選に限り七時半〆切）
「紐」（三句）西尾栞選
「リーダー」（指導者）（三句）西いわを選
「手帖」（三句）小川恒明選

席題　三題（当日発表）

柳話　（ハワイ土産）若本多久志

呈賞　☆各題天位・☆各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費　百円

幹事　柴香・渋舟・いさむ・潮花・文秋・清佑・狂二・与呂志・白水・水洞・すゝむ・蟻風子・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円同封（〆切三月五日）

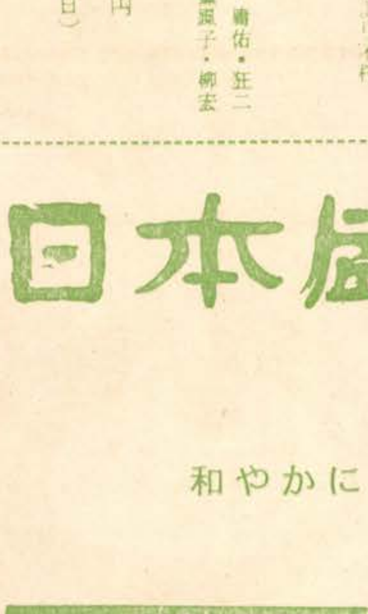
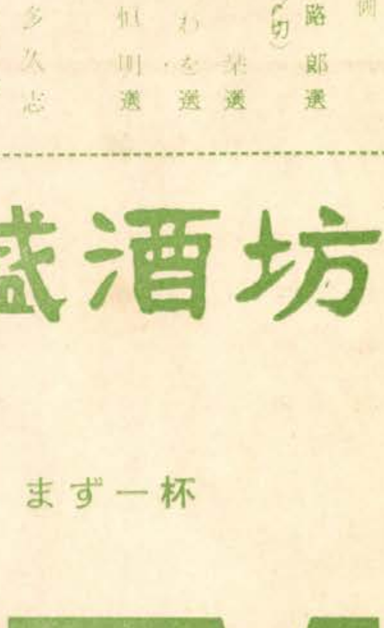
大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・大阪[illegible]六〇八一

4月本社句会
〃兼題〃
心臓　家出　声優　求人

日本盛酒坊

灘の清酒
ニホンサカリ

和やかに　まず一杯

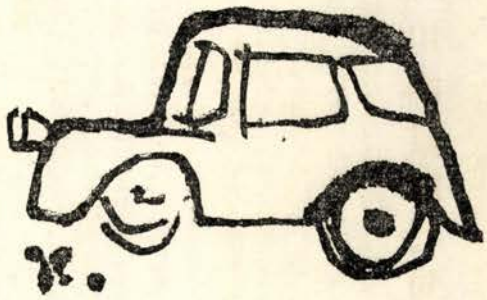
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

☆

麻生路郎

自家用車　もう一人ハネ二人ハネ
政治家が十七才をもう忘れ
結論がテロになるよな政治をし
政党にあいそをつかし糸を垂れ
ダンプカー眠むり議席も眠むる世だ
白票の外に手のない選挙法
バカにされる社説にしても飯の種
指紋だけ正直ものにされている



川柳雑誌三月号目次

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘
不朽洞句帖……麻生路郎…(3)
とけ込むということ……中島生々庵…(26)
豚の石焼き……築山快夢起…(28)
句会の珍客三巨頭……後藤梅志…(27)
古川柳かあちやん……東野大八…(25)
週刊誌あれこれ……金井文秋…(32)
愚の詩……今西生薑…(33)
名句と難句……麻生路郎…(4)
川柳と個性……直原七面山…(20)

やあ今日わ……「学校」白香・古方……「国鉄」水客・久米雄…(12)
「女医」良子・阿茶……「野球」紫香・貴山

眠っている本を……「柳詩文学文庫」の創設……麻生路郎…(18)
★現代柳人録……(28)　★川柳書架……(19)

句評リレー……いわを・佐保蘭・柳児・三司・六花…(30)

み……戸田古方…(29)
続・川柳料理暦……水谷竹荘…(31)
★不朽洞の人々……緑之助氏の巻…(39)　★友の会の集い……きさ子…(40)

★

川柳塔……麻生路郎選…(6)
同舟近詠……諸家…(11)
近作柳樽……麻生路郎選…(20)
金泥集……北川春巣選…(40)
各地柳壇……麻生葭乃選…(41)
★柳界展望……(38)　★不朽洞会から……(39)
入門講座……清水白柳…(34)
「午後」……小川恒明選…(36)
一路集「男」……弘津柳慶選…(36)
「割箸」……橘高薫風子選…(37)
★柳樽室……(46)　▼ペンの散歩……(46)

川柳 名句と難句

麻生路郎

〔二七五〕

くちづけをついに許した霧の中

（甲　吉）

彼と彼の女とは喫茶店でたびたびデートしたが、くちづけするほどのチャンスには恵まれなかった。そして日が経つにしたがって、ある物足りなさを感じていた。しかし機会は遂に来た。

ある夜、喫茶店を出たら、夜霧がたちこめていたので、ひしと身を寄せた。

その時に、彼の女はくちづけを許したと云うのである。詩情豊かな一トコマを巧みに描写した句だ。

〔二七六〕

労組も会社も他社を例にとり

（宗太郎）

余所の花は赤いと云うが、労組は労組で他社の例をとってベースアップを主張するし、会社は会社で他社の例をとって、儲かっていないことを力説する。年中ストの絶えない所以である。

条件の違う他社を例にとるほど、こっけいなことはないが、そこに気づかず例にとるところは労組も会社も知識の不足だと云えようと云うのである。面白いネライの句だ。

〔二七七〕

又かいなと国賓へ奈良の鹿

（柳　志）

奈良の鹿寄せといえば世界的に知られている。県や市では賓客を待遇するのに、公会堂の庭などで鹿寄を行ったものだ。ラッパをふいて沢山の鹿を駆り集めるのであるが、われ一と走り寄るさまはなかなか壮観だ。そして賓客の手から餌を与えさせるのである。一般の遊覧客でも、団体の遊覧客でも鹿寄せの壮観を見たかったら神鹿保護会へ申込めば、いつでも鹿寄せに応じてくれたものだ。近ごろのことは知らないが、やはり鹿寄せは行っているものと思う。

この句はたびたびの鹿寄せに、「又かいな」と擬人法で詠んだところが面白い。鹿は鹿寄せがあるなアと思うと、ラッパが鳴らぬうちから、ゾロゾロとやって来るものもいるが、三、四月頃の遊覧客の多いころには空腹を感じていないので、ラッパが鳴るのに行かぬと義理が悪いと云ったかっこうでノソノソとやってくるそうだ。その点では人間も同じで余り鹿を笑えない。

〔二七八〕

オーバーの袖は通さぬ愚連隊

（宵　明）

ドヤだとか、デカだとか、ヒーコだという隠語族で、多くは喫茶店やスタンドに巣食って、定職を持たぬ不良を愚連隊といっているようである。

彼等は常にオーバーの袖に手を通さない。サア喧嘩と云えばパッとオーバーをハネのけて身軽になれるからであろう。軽い穿ちの句だ。しかもこの特徴によって愚連隊の姿を巧みに描写している。

〔二七九〕

いんぎんにきいて歯科医はかきまわし

（静　馬）

歯科の患者は王座のような椅子に仰向けになって、アーンと口を一パイに開けると、大てい顔は見られたものではない。

「コレとコレが痛みますか。コレはどうです」

と、言葉や態度はすこぶるいんぎんだが、口の中をピンセットでかきまわすというのである。

いんぎんと、かきまわすとの対照がコノ句をユーモラスにしている。

〔二八〇〕

十二月八日の日本は強かった

（涼　髪）

十二月八日といえばパールハーバー攻撃の日だ。日支事変の頃だったか、父よあなたは強かったという軍歌が流行ったが、この句は「日本は強かった」は「父よあなたは強かった」から引用脱化したものだ。陸海軍の上層部のアツレキが生んだ悲劇であることを知らぬ国民こそいいツラの皮だった。この句の裏に、その後の敗戦国のみじめさを思わされる。

〔二八一〕

ねずみ取りねずみは罪のない顔よ

（笛　生）

朝、捕鼠器をのぞいたら、捕われの身の非運を知らぬ気に、鼠はキョトンとした顔をして、こちらを見ていたと云うのである。タッタそれだけの情景であるが「罪のない顔よ」がよく利いている。

〔二八二〕

不要でも規定で資料をとる役所

（弘　道）

役所ズバリという句だ。小役人が机にか

じりついて、しきりに何かの書き物をやっている。別にいそいでいるさまもない。

「えらい、ご勉強ですネ」

と、云うと、こちらを振り向いて、

「なアに、こんなもの、もう不要なんですがネ。規定なので、やっているんですよ。こんな資料なんか、時代おくれで役にはたたないです。」

と、云う答。

そんな仕事に人件費を払っているのが役所なのだから、役所に頭数がいる筈だ。皮肉な句だ。

〔二八三〕

一月一日昨日の道と同じだが

（夢　虹）

通勤の往きかえりに、昨日も通った。一昨日も通った。一昨々日も通った。それは他の道と何等変ったところはない。それなのに、今月の一月一日にはただなんとなく、心改たまるものを感じた。何故だろうかというのである。

今日からはという、希望の芽が、心の底から湧きあがって来たのであろう。ホン一寸した心の動きをとらえて句にまで盛りあげたところがこの句のいのちである。

〔二八四〕

提灯になるとはふぐも露知らず

（宏　方）

寒空の軒にぶらぶら下っているふぐ提灯は寒さを一層身にしみさせるものだ。一寸あたたまって行こうという人をひき寄せるネライからかも知れない。

しかし、ふぐ自身は客呼ぶための提灯にされようなどとはおもいもしなかったであろう。醜い、しかもユーモラスな姿を大衆の前にさらす気は少しもないだろうから。

〔二八五〕

地下鉄で会ったは空襲以来なり

（満　潮）

空襲で焼け出されてから、着のみ着のままの生活がながく続いた。ようやく落ちついたのが通天閣の見える西成の長屋だった。ふと地下鉄で、その昔さかんにやっていたころの同じ町の人に会ったのであろう。なつかしくもあり、はずかしくもあったという心境がよく出ている。

〔二八六〕

退職をしても旧部下まだ叱り

（紫　光）

アバンとアプレとの境界がこんなところにも見られて面白い句だ。

「ストもいいが、仕事を愛さぬといかんぞ」

と明治アタマの先輩は眼をいからして叱った。もちろんこの言葉は旧部下に対する愛情に外ならなかったが、昭和っ子には通じようもない。

「時代が違いますよ」

と定年退職者をジロリとながめたというのであろう。

〔二八七〕

枯落葉白亜の偉容あらわせり

（左文字）

森林のような大邸宅の中に、いつもは白亜の洋館が尖端を見せているばかりであるが木枯しが吹きすさぶ頃になると、スッカリ落葉となって、白亜の偉容が目に迫って来たのに驚かされ、その美にうたれたのであった。

〔二八八〕

女房が年じゃ年じゃと牽制し

（どんたく）

「ホイ、また忘れた」

と云った、引返えして来ては、女房に、

「もうお年だっせ」

と、ひやかされる。

「近ごろは飲めなくなった」と云うと、

「もう、お年ですもの、その方がからだのためですわ」

と、けんせいしくさる。この頃から女房の方が、だんだん強くなるのも面白い。

〔二八九〕

じんべ着て見ざる聞かざる云わざる日

（句念坊）

老年のわびしさがよく出た句だ。「じんべ着て」の上五で人物をハッキリと認識させてくれる。もうスッカリと時代が遷った。若いものとはソリがあわぬ。見れば云いたくなるので見ないことにする。聞けば腹の立つことばかりだから聞かないことにする。云えば、そんなことは、もう古いよと相手にもしてくれぬので一切云わないことにすると三猿主義を遵守したというのである。

しかしその裏には孤独の淋しさがヒシヒシと迫っていることを感じさせられる。引用句としては成功している。

〔二九〇〕

赤旗がだらりと立ったままつぶれ

（俊　江）

赤旗がダラリと垂れさがっている会社の横を通っただけでも、私たちは額にしわを寄せずにはいられない。思案投げ首の重役陣や鉢巻姿でくわえタバコの労組の人達が眼に迫って来るからである。

賃上げもいいが、ホントに会社の内状を知っている労組員が、幾人いるであろう。おそらく一人もいないのではないか。会社が潰ぶれて、今更のようにハッとするのではなかろうか。この句はそうした会社の真相を日向に出したようである。

結婚式場
長生殿
近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場　貸衣裳も
豊富にそろえております●6階
大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

柳原市　上田翠光

胸を病む人か木蔭に椅子を寄せ
看護婦も女体としての線で着る

豊中市　戸田古方

メーカーとは味もそっ気もないひびき
雪があるので滑るんだと出かけたり
掃除器の上にほこりがたまってた
生活の中へ愚禿ととけこんで

大阪市　市場没食子

師走だと言うに喪章でまた出かけ
忘年会ＡＢＣと会費に差
逝く歳へ彼と彼女がまだ添えず
禍につながる粗品とも知らず
元日も働いてます赤電話

西宮市　若本多久志

温泉の会議お酌がもう来とり
長男が哲学志望でガクウとし

渡米

リンガホン俄勉強とは知らず

長女婚約成立

婚期さえなければ四五年おきたい娘こ

ホノルル市　築山快夢起

折角の虎の子株にしてやられ
檻の虎夢は遠くのジャングルか
親ゆずり室には過ぎた虎の皮
島の春甘蔗畑に明けて来る

大阪市　正本水客

娘のしぶい好みがふいと案じられ
サン付けにされ二次会も逃げられず
理屈には勝った心算りで帰って来

高槻市　丸尾潮花

チャンネルを歌舞伎にかえて餅を焼き
眼薬をさして麻雀台へ向き
ヤーホーが好きでとうとう死なはった

大阪市　北川春巣

正月を出てみて人の出に呆れ
三カ日工員募集貼ったまま
寝正月どころかパチンコ屋で稼ぎ
駐車禁止が読めないのんか自家用車

ハワイ　羽佐間柳薬

嘘でない齢を写真が見せてくれ
貰録を無理に見せたい廻り椅子

堺市　吉田圭井堂

卦線まで引いてた株がまた外ずれ
都心部へ行く乗物を何にする
不景気に当の外れた神もあり

防府市　長野井蛙

けだものと思えど女体拒み得ず
未亡人子の倖せに目をつむり
下手すぎて敗けてやるのに骨が折れ

岡山県　直原七面山

底なしの馬鹿だよ女房まで盗られ
金ですむ話になってからもつれ
弟の嫁が美人で腹が立ち
死を賭けたドライブへ娘はたじろがず
夢のような話に女乗って来て
牛のような人を愛して淋しけれ

大阪市　西森花村

死水を取る日と知らず今朝も起き
お骨ではやっぱり返辞してくれず
どの星が母さんだろか父と子と
声立てて笑うことなき子に気付き
母の亡い正月父と寝て暮し

鳥取市　河村日満

ストせずに済んだ師走へ妻を連れ
もぎとったような賞与が出る師走
十二月よそのストにも馳けつける

自転車もとめず年始を云うて去り
豊中市　足立春雄

年末の温泉一寸夜逃げに似た感じ
マスコミに薄いボーナスねらわれる
一現は先ずネクタイを讃められる
かずらだけつけた所が芸者です
倉敷市　木村千容

借景へ雲去来して詩がうまれ
口あけて灰の落ちたも知らぬ顔
大阪市　木村水洞

世話やきにモーニングの要る用が出来
暖くうして行きやとお通夜へ気をつかい
チャンネルに親子のズレを認識し
大阪市　真鍋一瓢

やりよると息子を知るは男親
湯の郷温泉で
気泡泉ふところ寒いのを忘れ
大阪市　後藤梅志

ものは進めど人の心はそのまま
人間に奥行のない詠進歌
赤電話木枯しのふく街角に
後家二年四柱推命などに凝り
米子市　小西雄々

胸かりて泣ける貴方を恋しがり
お手伝さんと呼んでも来ぬ女中

お土産のザボンを提げて肩がこり
大阪市　山川阿茶

正月に来て跡取りを決めと云う
お正月インスタントの島田まげ
バーづとめ小心のハズむかえに来
大阪市　金井文秋

暴落のおかげ働く気に戻り
からだにもがたつきが来た五十一
程のよい馬鹿にはなれず辞表出し
加賀市　那谷光郎

古雑誌バタ屋レジャーを読みふけり
賽銭が神に聞えぬ一円貨
表彰へ紋服篤農のぎこちなく
下関市　桜川不水

艱難辛苦なんじを瓦にし
とし一つとる酒五臓六腑まで
3ブンの2は独酌の子沢山
岡山市　浜田久米雄

交通事故で死ねば阿呆かいなと云われ
ダンプカー威風の風を切って行き
出雲市　尼緑之助

ねむれない若さ弟を蹴ってみる
弔電に附す肩書の長いこと

有線放送

有線に乗せてお宮の寄附のこと
大阪市　水谷竹荘

ホームバー作れる身分にやっとなり
いい歳をしてと老妻まだやく気
鳥取市　杉谷湖山

一度怒ってやろうかお人よし
年よりの日から年よりにしてしまい
煮凍ったまま元旦の魚が出
京都市　大鶴喜由

御身は好きだが苦しみに巻き込まじ
宮様は紙幣の温みをまだ知らず
東京都　山根白星

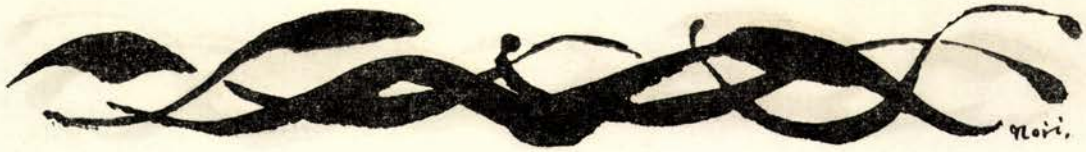
慕情濃く支線に乗ってあてどなし
愛の巣へ太陽と言う不粋もの
奈良県　飯降白香

宗匠の下劣さも見たり初茶会
廃液の臭気のめし屋で話しあい
いいたいだけいうて職場は出てきたが
時がみな解決なんてじれったい
奈良県　西辻竹青

家柄か育ちか正座よろめかず
晩年はと言う晩年が来てしまい
岡山市　服部十九平

妻ニヤリ秋刀魚を焼いている自嘲
岡山県　大森娯句楽

寒風に噴水の水逆らえず
白髪染める気になる妻をいたわらん
西宮市　若林草右
老年控除さびしく申請かいて出し
告知板地図までいれて待っていず
菜園を目勘定する野菜高
広島県　山田季賛
二次会は雪になろうとなるまいと
知らぬより知ってる人へと子の古衣
名案はやっぱり金が先に立ち
長男は母へ次男は父へつく
岡山県　田村藤波
年賀状来るから宿帳嘘を書き
玉子酒で治した若い頃の風邪
児島市　本田恵二朗
義母逝きぬ
浄土への旅路へ晴れた日よ続け
母のなき茶の間へ話題湧いてこず
経を読むたどたどしさへ遺影笑む
京都市　松川杜的
録音の佳境へ柱時計が鳴り始め
会議　宴会　宴会　会議　正月のカレンダー
鳥取市　森本法泉子
元旦の川はゆったり流れて来
元旦は近くの山もうすく雪
元旦のカメラに母もかしこまり
元旦の牛乳まんだ放ってあり
吹田市　橋本幸男
上役も呼び捨てにする労使間
宿直は飲んじゃいけない規則あり
堺市　高崎雄声
証券ビルみんながよって建ててやり
省みてミスである事のみ多く
島根県　藤井明朗
酒強い事成人の日に解り
若返り若い女にだまされる
家中をなで切りにして風邪は去り
岡山県　永松東岸
恬として恥じず裏切りして居ても
わら人形へ切りつけるよう批評され
邪魔になりゃせんかととしより気をつかい
二三人行方不明となる師走
倉敷市　野田素身郎
料理屋で話せばあっさり承諾し
夫いとし句帳手にしたまま眠り
集金にナンバーワンを連れて来る
大阪市　清水望峰
初詣で財布二つに分けて持ち
人は人俺は俺で行く串カツ屋
大阪市　木村十悟
転勤に老人夫婦ほっとかれ
メートルが上れば血圧など忘れ
伝説を信じない子に云い負けて
大阪市　伊達堰子
中風の出た親分でほっとかれ
婦唱夫随終い戎を歩かされ
大阪市　不二田一三夫
「経済はお任かせください」自殺させ
花月亭九里丸氏逝く
高座では見せない顔で焼香し
「任侠」が死語になってる味気なさ
兵庫県　酒井ひか平
父と娘でペレー換えっこして出かけ
スキーヤーからきし金は持っていず
芦屋市　丸川初甫
椅子の下へ食べかす捨てて旅楽し
夜の蝶だます笑顔は別に持ち
下戸の暇柱で数える畳数
天才と言わんばかりに子のピアノ
唐津市　新岡回天子
演説もどこかになまりなつかしい
岡山県　池田古心



入智恵は喧嘩にならぬ愚を演じ
大阪府　早川清生

昔はよかったなと天皇がおっしゃった
山で死に遺品のカメラから笑顔
大阪市　平井井平

近づけば富士にもキズが一トところ
堺市　辻圭水

子の成長喧嘩するのも派手になり
月給前子供も無理を云わぬなり
金詰り国の予算のでかいこと
岡山県　野々口美舟

よちよちにおせじを言えば又ころび
おせじとは知って母の日ごまかされ
りんじゅうのおせじは泣いてくれちゃった
西宮市　小浜牧人

正月の昔気質が捨て切れず
人生を白の布石で闘わん
似たもの夫婦となりし歳月
成人の日から叱らぬ父となり
映画「京化粧」より
白川の水に流した愛哀し
池田市　前川左文字

一合の酒がタクシーをひろわせる
恋ならん一ツハンガーに重ねあい
定年へ借りてきたよな課長
岡山市　林葵丘

五十メガトン級だったと子等静か
岡山県　池上知恵美

紛失物猫も一応立たされる
おとなしいと云われる人妻のスローモー（ママ）
おさしみの垂れを気にする借衣裳
女の心配そんなもんかとバカにされ
勝ってくるぞと猫出たっ切り
大阪市　橘高薫風子

地図と一緒に夢を畳め
親切な官吏なかなか出世せず
鏡台の前の思案はたかが知れ
大阪市　桝本蕗児

俺もまだ若いなダンスを習う気に
父ちゃんがダンスと女房笑い出し
長男のバットへボールあててやる
大阪市　西川晃

も一人の俺がしきりに吼えたがり
ひとを誹って淋しさがこみ上げる
釜ヶ崎風景
街娼の影が凍てつく鈴蘭燈
鳥取県　田中蛙眠子

出し抜いた記事へ警察署があわて
ルル三錠よりもコップ酒が効き
バイク追突若鷲もかくあらん
岡山市　林葵丘

浪花節すきで民生委がすかれ
資本論シベリヤ帰りにあしらわれ
嫁きおくれ若いと云われるのも淋し
小説のように病んでる嫁きおくれ
神戸市　仲どんたく

てかてかと老人二日の朝の艶
新春の長女をカメラで追いまわし
ホステスも島田脱ぐほど酔まわり
きれいな指やったと見合い顔を見ず
平田市　久家代仕男

我儘な親父ですワと惚れた末
人使い荒い親父と知る炬燵
典雅とや土でつくねた皿にさえ
大阪市　本多柳志

事故死亡五人ちっちゃな記事になり
クリスマス悔い改めん事が増え
一票をねだる賀状かルピもつけ
出雲市　原独仙

都山流父ちゃん六段だけが得手
インタビューどの関取も声嗄れて
西宮市　野呂鵜汀

誘惑を待つ溜息が聞こえてき
セックスはスポーツと言う世にかわり
愛人が母にもあった日のショック
西宮市　樋口舟遊

初荷まだ業者まばらな湯呑酒
魚の値がたき火の横で出来上り
牡蠣海鼠旨しはじかむ手鍵なり

佐渡市　高野むじな

女えげつのうなってたクラス会
うんうんと世辞をうるさく聞くお医者
芸術祭参加でキスのない映画
さとす日あり叱る日あり相談欄せわし

高砂市　吉原紅月

マンボズボンが似合う娘母の気をもませ
寅年の運をパチンコ屋でためし

大阪市　石倉旅風

傍目ほど哀れでもなし籠の鳥
テストする機械をテストする機械
白足袋をはけば滲んで出る女性
教典の字句のうまさに逆わず
装飾と思えばネオン綺麗なり

続西成界わい　七句

大阪市　魚住満潮

千円の無心子供を背に負い
メガホンの声は「アカハタ」読めと云う
十日戎スリは笑が止らない
死にぎわも百円の貸し忘れてず
競輪ですっかりすった顔になり
正月三日仕事よこせのデモ通る
西成の闇にキッスの音がする

愛媛県　村上旭童

下駄を割る程に元気な娘に育ち
給料のことから社党支持になり
恐妻をさかなにされている男

倉吉市　大前鳴恍

院長のサジうどん粉で眠らされ
面会の妻のあれたる手を握る
8ミリへここの長屋も新春の顔
補聴器へ受付にべもない返事

神戸市　傍島静馬

せめて年賀状だけなと筆持たん
教えた麻雀徹夜せいとは云わなんだ

笠岡市　木山遠二

勤労奉仕夫の軍手借りて出る
右左なくて軍手の気らくなり
貸し借りの貸は頭へこびりつき
田舎町駅から五丁程離れ

布施市　森下愛論

告げ口を恐れ子供はついてくる
キッスシーンそっぽ向く程子は育ち
胴忘れの文字子供にもあなどられ
参観日案外素直な我が子いる

姫路市　槙村客遊子

駅長になれば助役の頃こいし
ライバルを訪えばなる程門がまえ

大阪市　河井庸佑

定年へ入社時代がなつかしく
自分にはできぬのぞみを子にたくし
蛙の子は蛙末っ子はなさぬ舞扇
両親が先生というに出来なすぎ

大阪府　谷沢好祐

捲き賃を助ける重い杵を振り
おしゃべりの時間ならやはりある師走

泉大津市　高津徹也

おいとまの駅へ淡雪降って来る
オーバーの背に女の意地が発散し
つまびけば今も昔の琴の弦
ウインクへかつてこの手でやられたる
京女見返る姿(しな)が嘘でない

愛媛県　槇紫光

之がわが顔かと鏡拭きなおし
面会は俺でなかった眼を閉じる
病室の誰も曜日を知らぬなり

青森市　工藤甲吉

値上りをせぬのは亭主ばかりにて
金ためる夢がやぶれる師走の灯
有難うと云ってやりたい主婦日記
横書が僕の個性を縮ませる

松江市　小林孤呂二

父さんは海釣り母さんは百貨店
末っ子は蟹のこわさをまだ知らず
より道へ雪は静かに積るなり
松江市　舟木与根一
本当の真剣な顔小児麻痺
他人様につくした頭きれいに禿げ
十二月家主へ立ったまま払い
十二月倦怠期など言うとれず
正月を理由に遊びに来てる恋
豊中市　林　夢虹
標準語で結婚を父に切り出す
霊柩車の運転手が悲しそうな顔してくれる
里帰り母と一つの夜具に寝る
西宮市　山本一傘
庭のある家を持ちたい植木鉢
貧乏人とうとう騙され続けなり
親切と見栄がちょっぴり金を貸す
若いのに薬の名前知り過ぎる
正月も二十日過ぎると寒いだけ
倖せの半分ほどを金で買う
大阪市　今西生萱
釜ヶ崎風景
総評に変っただけの釜ヶ崎
情婦とヒモ赤が男で茶が女
グデングデン「こんな女に誰がした」
京都市　室井八九寸
本願寺へ溜れば煤も拝まれる
値上げ決めといて理由を評議する
ハンストに選ばれ動けぬほど食べる
七五三子まで仮病にする苦労
岡山県　横山一声
一回目は盲腸と言うておろしたが
小松市　関戸宗太郎
社運もう新年広告見当らず
勧誘をあきらめ挨拶しなくなり
泣く人も無しふるさとを発車ベル
石川県　高山涼髪
どぶ掃除してよと日曜おこされる
転々と小じわかくして湯女づとめ
美称市　安平次弘道
暴落で首相の強気を寒う聞く
小役人自分のミスまで呼びつける
宇部市　平田実男
尼さんに魅力感じた自己嫌悪
妻とする買物無性に肩が凝り
和泉市　井阪東天紅
娘の飾棚に今年は虎のコケシふえ
ドラマだから姉に恋をばゆずりもし
大阪府　高橋尚史
病院に裏口があり柩出る
成人式
訪問着持ってる娘だけ式に来る

同舟近詠

大阪市　橋本緑雨
谷底の景色が見えるこわい道
タクシーのとりあい見てる雨やどり
須坂市　高峰柳児
亡くなった友を数えて書く賀状
すぐ金に触れて清貧などけなし
末の子を寄ってたかってすねさせる
足洗う相談いきなり金に触れ
老らくもまだそろばんも達者なり
格下げに甘え停年しがみつき
和歌山市　秋月宏方
株持っている社のビタミン剤を買い
単車にも乗る社長にて親しまれ
七面鳥庶民の口に縁遠く
今治市　長野文庫
正義派と云われ商売至極下手
あげ底のような挨拶名調子
金を出す段に予定の数が減り
大洲市　米沢暁明
頭数そろえる代理出しておく
城山へこれは何事個人の碑
能筆の続けて読むから読める文字

やあ今日わ

同舟同職―つまり川柳という一つの舟の中で同じ職についている方々に「やあこんにちわ」と呼びかけてもらった。

―編集局

「学校」

飯降白香

古方先生、お元気でしょうか。
只今は、卒業前でどうも生徒が落つかず、その余波で、先生までソワソワと読書に親しむなど縁遠い毎日です。
この間も、
「飯降さん」と呼ばれ、ふりむくと、男生徒が無精髭を掴みつまみ、ニヤニヤしているのです。
「まあ！　うすぎたない。何？」
「答案をかえして下さい」
同僚の若い先生は
「恐い主任どのもサン付にされたとは」
といって大笑い。どうも女教師は男生徒にはかないません。
サン付けで呼ばれ女教師おちょくられ
註　男生徒の間で先生をサン付けで呼ぶのが流行しています。親愛の意味だそうで。
「先生　どこかいい就職口ありませんか」
「いいって！　例えば？」
沈黙!!
「どこでもよろしいです。紹介して下さい」
「そう！　じゃ、○○はどう？」
沈黙!!
「御両親に相談してごらん、そしてお返事して頂戴。」
「はい」
翌日。
「先生、○○でよろしいから紹介して下さい。書類も揃えてもってきました」
早速、○○へ受験にやった。さてその翌日○○から採用通知に接したのでよろこぶだろうと生徒にしらせると
「若いうちに、一杯いろんな事がしたいのです。そういうことのできる所が希望ですので○○はやめます」
「そう」

先生、唖然たる態。
師の情も知らず生徒は虚栄(みえ)坊で
教師三十年漸く馬鹿が身について
その顔で厚顔しいこと云わんとき

民主教育はまことに恐しい。いいたいことをいい、したいことをする。しかし、又人間の味を、特に若い人の赤裸々な味を満喫することができて、結構、年はとっても楽しいあけくれでなかなかやめられません。

恩なんか知らず
すくすく子は伸びる

戸田古方

試験監督

カンニングみつける役も役のうち

いやな名ですね。しゃべる相手はなし。勝手なことも出来す。機械のテストだって監督は厳重にせねばならぬことぐらいはわかっていますが、機械とちがって相手は人間、しかもその人間は育てあげなければならない大切な預りもの、ほんとうに立派にするにはどうすればよいか。自覚とか反省とかいっても、なかなかむつかしいんでしょうね。やっぱり教鞭という文字にあるように鞭はいるもんでしょうが、いままで通りでない鞭をみつけようと苦しむこと、苦しむこと。

ひげを抜き終るとテスト終ってたというようなところで。

成績

落第の醍醐味なんか知るまいが
秀才で独走する人も多いようです。ことに若い人には。独走にはついて行けません。どうして自分の道をみつけさせるか。そのよき相談相手こそ大切じゃないですか。

一番出来のわるいのが先生志願する
世間はそんなことをなげいています。それが当節です。が、天狗の鼻の少しでも低いのもちっとは

あっていいのではないでしょうか
二号の子なればこそ先生にしたく
たいていこんなのは秀才なんでしょうが、秀才型には案外な盲点があるものです。

不良化防止

制服の紺とは別な裏の色
各学校には生活指導係、すなわちディーンという専門家がいますが、いっそ刑さんみたいに黒づくめに賛成するほどでもありません。派手な身なりは不良に乗ぜられるといいます。ある程度の真理はあるでしょう。その割りふりはむつかしいことです。
罰金とかけばやめるかと思い
やたらにややこしい規則をつくっても、チエくらべみたいに抜け道の捜し合いです。
倫理再建右へならえという如し
そんな中からちょっぴり、あってはならない最悪の日が又きそうな気がして。

たたかい

盲従の癖まで上品だといわれ
右のものを左に移すにも、いやいやするのと、すすんでするのとでは大へんなちがいです。納得してというのが当世流行の民主主義というものなんでしょう。大人の思い通りになったらよい子になり、思い通りにならなかったら悪い子よばわりするのはいやですね。
辛抱せいという説教はききあいた
レッテルをはってもらいにくるのはこまりものですが。
恩なんか忘れすくすく子は伸びる
恩なんか知らんように見えるのが案外恩を知っているものです。じっとあせらず、辛抱強くまつことです。

女の子

女生徒のわかれ録音してみたし
もう二〇年も女の子の中にいますので、こんなこともよく見かけます。卒業式には演出しない涙を上手に流してくれます。
追いかけて来てまで女生徒のわかれ
今年も、もう目の前にその日が来ました。

「國鐵」
——レールを離れて

正本水客

去年の10月には白紙ダイヤ改正と称えて、ここ数年来少しずつ、時間と時間のあいだをぬってふやしてきた列車を一挙に洗いかえて東京・大阪間を3時間で結ぶ夢の超特急といわれる新幹線が出来上るまでは、もう増発の余地がないほど長距離列車が増えましたが、反面貨物や通勤輸送が押えられているという批判もあるようです。特に今までは主としてローカル線に走っていた気動車が一躍、特急として登場し、大阪中心に北は青森、南は鹿児島まで、中でも青森行の白鳥号は発足当時、再三故障を起して〝瀕死の白鳥〟などとたたかれて関係者をひやひやさせました。
一昨年には東北地方に〝疲れない日本風の楽しい旅行〟と銘うってお座敷列車が誕生しました。誰でもが何となく考えていることをズバリ実行したのは、いいアイディアでした。
坐って行ける畳と障子、お年寄や婦人層になかなか好評の由。お銚子でチビチビやりながら麻雀を楽しんで……、飛行機にもスチュワーデスがいるんだから……などというやからも出て来ようというもの。昔むかし内田信也さんが鉄道大臣だった頃、列車にバスを取り付けて一風呂浴びられるようにしたこともありましたっけ。
国鉄をテーマに等という編集部の言葉を真に受けていると話がかたくなっていけません。
なるべくレールを離れましょう。

○

国鉄本社の会議で東京に出張した時には夜行までの時間を私はよく上野の鈴本の寄席へ出掛けます。去年の夏だったか、帰りの都合で何時頃に終るか入口で聞いてみたら「九時少しこぼれます」と答えた歯切のいい江戸弁が印象に残っています。
水谷八重子が多摩川の撮影所で仕事をしていて、セット待ちに川下へドライブしたときに梨畑があったので、少し分けて貰えませんかと聞いてみたら「折角だが、まだ遠いんでね」と断わられたということです。遠いという言葉は距離でなく熟する時機をさすらしい。時間がこぼれる、果物が遠い言葉って面白いですね。
この一月の末に上京した際にも鈴本へ寄ってみました。放送でおなじみの鯉香が得意のノンキ節のトップに歌会始めの盗作問題を早速とりあげていました。今度の発生地は岡山附近だから貴兄の責任範囲という訳です。短詩型の文芸で同じ句が出てくる場合は大体三つあると思います。全く偶然に発生する場合と、過去の記憶がよみ

がえってきて自分の創造のように錯覚する場合と、何かの目的で故意にする場合と、鉄道用語でいえば一閉塞区間に2本の列車が進入してきて追突事故を起したということですね。

まわりの人達に意見を聞いてみると、そんなことを発見できない選者がなってないと云う声が相当でてきて、私も時に選句を仰せつかる立場上ダーッとなりました。こんな場合の発見は果して可能かという問いに対して国立国会図書館はイエスと答を出しています。三十一文字をカナに分解して、それを記号化し電子計算機に記憶させておくというのです。

三十一音のコンビネーションは一寸考えただけでも天文学的数字になることは間違いないが、とに角イエスはイエスである。

○

1月13日、姫路の句会へ出席した帰り、大阪駅へ降りたとたんに眼をみはりました。階段からコンコースへかけて、赤、黄、青、黒いろとりどりの行列が延々と続いて皆んな袋をかぶせたスキーを立てている。お嘶の国の儀仗兵が並んだように華やかな雰囲気です。連休を利用して長野行のちくま号を待つ人達でしょう。この忙しいのに長ったらしい物をかついで、態々満員の夜行にゆられて等とちょっと抵抗を感じもしますが、徹夜の麻雀や深夜喫茶でねばっていることを思えば、はるかに健康的で好もしい。だがブームに乗って不用意な行動が多いのは困ったものです。グレンデでの捻挫や骨折ぐらいは、まあいいとして、山は登ったら必ず下りるものであることを肝に銘じてほしい、山好きの一人としてつくづく思うことです。

○

二月には大阪のコマ劇場へ林美美子の放浪記がかかります。アドプリ俳優から森光子が一躍まともな主役に抜かれて非常な熱演をみせていますが、この人ともう一人松竹新喜劇の酒井光子と〃ふたり光子〃として前から注目していた人だけに私も嬉しい。

その中に、主人公が失意の身を抱いて故郷の尾の道に帰ってくる所がありますが、細長い尾道の町は船の気笛がこだまして、その木魂が何回かかえってくるあたり印象的です。尾道といえば、もう廿年の昔にもなりますかしら、西日本鉄道人川柳大会を久米雄さんの肝入りで駅前の松風館で開いたことがありましたね。路郎先生と岡田某人君と三人で先生のお家の墓所へお参りして、瀬戸内の風光のなかで辺りの草取りをしたことなど懐しく思い出されます。

○

これは人から又聞きの話ですが、俳句の山口誓子さんが国鉄の定期を買っておられた頃、或る日改札で、これは女の名前だから貴方のではないと云って、どうしても開いて呉れないので困られたということです。

フロントサービスの面からも、第一線に立つ若い人達には短詩型文字の一つぐらいは読むようにしなければ不可んと、近く十合総裁に建言したいと思っています、可可。

○

古い句帳をひっくり返してみると懐しい名前が眼につきます。

食堂車　日の出の海だ急カーブ　九天

寝台車　日本刀と長く寝る　木履

途中下車いきなり車夫に寄りつかれ　山雨楼

昭和14年の九月には久米雄さん等の広島転勤を送っています。先生の句で締めくくりましょう。では御機嫌よう。

手をうけて待つとこへゆく男ぶり　路郎

汽笛の中を歩く

浜田久米雄

昭和三年秋、国鉄に入社した第一歩が宝塚の駅であった。その時はやっていた歌が「うるわしの思い出モンパリ」で田舎の中学を出たばかりのぼくには珍しいもの変ったものばかりで、なにかにどぎもを抜かれることが多かった。あれから三十四年半、大鉄局、広鉄局を回って岡山に帰って来たのであるが、よくもまあ我慢をして暮して来たものだと思う。もうあと三年すれば五十五才の定年を迎えることになり、三十七年半の鉄道生活に別れを告げることになっているので、なんとかして定年まで頑張りたいと願っている。大阪で川柳を始めてしばらくしてからの句に

制帽でわが行く道のはるかなる　久米雄

という句を創ったことがあるが、はるかなるわが行く道も、もう三年という先が見えたのである。神戸の馬詰苦楽公氏も長らく鉄道生活をしておられ、退職された時のあい拶状に

退職へ汽笛の音も他人めき　苦楽公

上五はひょっとすると間違っているかも知れないが、これ迄「うちとこの汽車」だと思っていたのが「よその汽車」となってしまったという感慨深い句を寄せられた。ぼくもやめて見ないことには実感はわかないがどうもそんな気持になりそうな気がする。

東海道新幹線

欧米の鉄道は、ほかの交通機関が発達して鉄道を利用する人が少くなったため斜陽化しているが、日本の鉄道は輸送力が足りないため斜陽化される傾向にあるためと国の経済生長に合わすため昭和三十六年度を初年度とする新五カ年計画を樹立し、東海道新幹線の建設に全力を集中するとともに昨年十月には全ダイヤを白紙に帰した白紙ダイヤ改正を実施して大巾な輸送力を増強した。

東海道新幹線は三十九年一月完

成を目標に用地の買収は、ほとんど終了するし、工事も予定どおり進んでいる。この新幹線は東京大阪間を最短距離で走るから、いまの五五六キロが五〇〇粁と約一割短縮される。駅はいま一三〇あるのが十二駅しか造らない。線路は道路を立体交叉をするから踏切がなく、レールはロングレールを使用し重さは五十瓩（一米の長さ）が五十三瓩となり、高さも十五粍高くなる。

またトンネルや鉄橋の長さも増加して、トンネルはいまの二七粁が六五粁に、鉄橋は三五粁が四四粁となる。トンネルの高さは変わらぬが巾は一米広く九・五米になり線路は一米四三糎と四〇糎広く客車の長さは一米五〇糎長く、巾は三・四米と四〇糎大型化され、客車の定員も十八名多く一両百名となるため、通路をはさんで二人掛けと三人掛けの座数が並ぶのである。

ちょっと話が堅苦しくなったが、特急は東京大阪間を三時間で走るので、いま飛行機が一時間五十分かかり、東京の銀座から羽田までバスで四十分、伊丹から大阪の中心まで四十分かかるので合計三時間十分を要するのであるから飛行機よりも安全でしかも十分早く着く勘定になるのである。現在米国でも飛行機が発達しているのにお別れの時には「ハッピイランデング」と幸福な着陸を祈っていることを思えば安全なものと言わねばなるまい。かくして夢の超特急はあと二年で実現しようとしている。

長生きがしたい超特急の夢

久米雄

駅長試験

鉄道に入って長い間勤めていても駅長にならなくては家族、親類知人から鉄道で出世したように言われない。駅長と管理局長とが市の会議に出席した時、席の順序は駅長が局長の上座に指定されていたという笑い話もあり、鉄道では駅長さんが一番えらい人であると一般に認識されている。だからみんなが駅長になりたがるのであるが、これの選考は局の部課長や駐在運輸長がその人の経歴、勤務成績を勘案して推せんして来たのである。この方法よりも変った方法で駅長に登用するのが岡山鉄道管理局が今回採用した駅長登用試験である。

この試験というのは所属長が推せんした職員を社会常識、業務常識、管理常識の三科目にわたって筆記試験を行なう。この第一次試験にパスした者に対し第二次試験は討論会と口頭試問である。討論会というのはあるテーマ、たとえば米の統制撤廃は是か非かを与えて半数を賛成半数を反対に分けて討議をさせ、この討議の論旨、発言力、態度について局長部長が採点をするのである。これがすむと一人ずつ試験委員の前に呼び出されて口頭試問を受ける。これらの試験を全部優秀な成績でパスした者のうちから駅長の欠員補充がなされるわけで二本筋の赤帽子を着ようと思えば並大抵でない努力を必要とするのである。

あくび噛み殺し駅長汽車を出し

久米雄

「女醫」

太田良子

やはり女医タイプと云えば阿茶さんのような方がピンとくるでしょう。私なんかはこの年になっても、ちょかちょかしている。子供と一緒になって遊んだり、喧嘩したり、夫婦喧嘩も度々するし、時には買物カゴ下げて市場へ走る事もあります。

私は元々医者は余り好きな方ではなかったが、父がすすめるものだから受験したものの、パスしてみればその喜びは今でも忘れる事が出来ない。女でも何か身につけている方が特に今の時代においてよいと思うし、医者なら開業でもすれば共かせぎと云うても家庭と両立出来る可能性が多いと思う。その点でも父には感謝しています。

とりすましているのが余り性に合わない私は診察場でも非常に不愉快な時は別として、よく患者と冗談を云うて笑わせたり、時には怒らせたりする。阿茶さんもよく御経験される事でしょうが、患者の中には勝手な人がいて、売薬などでいよいよ手に負えなくなったような、病気を医者へ持込んで、診てもらえば明日にでも癒るように思うのですね。私はよく云う「医者は手品を使って病気をなおすのではない。やはり病気にも癒す時期があって、その為に医者も患者も最善を尽すのだ」と。

そうすると一度こんな事がありました。病気の大体の経過を説明しているのに二、三日同じ事ばかり訴えるので右のような事を云うて帰した。それから一時間ばかり経って診察を終えて美容院へ行ったところ、丁度その奥さんが来ていて「今、先生の事云うてましたん。手品みたいに癒らへんと叱られたと」そこに居合わせた人々は面白い事を云うといってお腹をかかえて笑ったので私も一しょに笑ったものの、そこはちょいちょい行くのですが、私が医者だとは知らなかったもので見なおされたような具合になりちょっと体裁の悪い思いがしました。

阿茶さんは看護婦さんとお二人だから二六時中先生とよばれていらっしゃるでしょうが、私などは診察場では先生、診察時間外は奥さんお母さん、良子などと呼ばれる。気分が二つの場所では変ってしまう。診察中に奥さん、お母さんなどと声を掛けられると、何だか世帯じみてちょっとためらうような思いがしました。

うな気持になるし、買物カゴを下げて市場なんか歩いていたり、子供連れでぶらぶらしている時に患者さんに会って、先生と呼びかけられると、これ又ヒヤッとする。先生と云われると、何か責任のようなものを感じる。面白いものですね。

大体私という人間は貧乏性に生れていて、傍でバタバタしていると、自分もしなければ済まないような気持にかり立てられる。（常にではありませんが）、そういう意味で診察場に居ると、午前中は子供も学校へ行って静かだし、患者も居らなかったりすると、一人で色んな事を考えたり、したりする事にしています。大きなカガミの前で踊りの手を一生懸命にさらえている時突然ドアがあくと、見られへんかったかしらとドキンとする。夕食は何にしようかな。どうせお父ちゃん遅いかも分らへんから、やっぱり子供の好きなものを作ってやろうとか。午後の休診の時間にする事をあれこれ考えて楽しい時もある。家の中の者には患者を診て働いているように見えて実は右のような次第。又これと反対の面もあり、行き度い所も、仕度い事も診察時間に制約されて出来ない事もある。そんな時は仕事がなかったらなあーと思う。相手が患者さんであってみればそう自分勝手な事で休むわけにもいかない。どんな立場というか仕事であっても一長一短があるものですね。

女医でっかと足の先まで見なおされ
テレビ料理患者をちょっと待たしとき
先生が市場でっかとのぞかれる
バス待つ間を患者しきりと聞きたがり
辛抱しでと背中叩いて手術台
診察場へ子供宿題下げて来る
ムカムカとカルテ荒っぽい文字になり

良子さんへ

――貴女は眼科・私は皮フ科

山川阿茶

お互い女医として開業している二人。貴女は眼科、私は皮フ科でする事はちがっていても何か医者としての共通な、うれしさ、かなしさ、なさけなさ、癪にさわる事等々があるはずですね。貴女には御主人と子達があるから妻として母としての気苦労なり、喜びなりがプラスされるわけです。

良子さん

医者になっていてよかったと思われますか。私も罹災後は免状を役に立てて世渡りをして来たのですけれど医者はあまり好きじゃないのです。いつも思うのですが、おいしい物を喰べようとか美しい着物を着よう、楽しい旅行をしよう、お芝居を見ようと思う自分の欲望を満足させるために費うお金は覚悟の上ですから楽しんで惜しげなく出せると思うのです。けれども予期せぬ病気、願わぬ病気、したくない病気のためにお金を払って貰ってそのお金で自分たちが生活してゆくのだと思うと何となく嫌な気持なのです。勿論苦しみを和げ病気を治してあげて感謝される気持はいいけれど無報酬だったら、どんなに気持がいいだろうとね。

免状を役に立てない倖さ
阿茶

この句のような気持がないではありません。

良子さん

貴女の科も割合死と直接関係のないようですが何と云っても眼を扱われるのですから気苦労が多いと思います。私の方も往診や夜起こされる事は先すありませんが皮フ病の人はアレルギー体質の人が多いし性病の方はペニシリンやマイシリン等ショック死を起こしやすい薬を使用するので度胸のない私はオッカナビックリと云う程でもありませんがまアあまり気持がいいとは云えません。人情が悪くなって不可抗力にも因縁をつける御時世ですから。

良子さん

大した苦労もせず治療して大変感謝されて頂き物をしたり患者の紹介をして貰ったり又大変骨を折ってあげたのに薄情なやめ方をされたり、健保を大変ありがたがって遠慮がちな人と、使わねば損と云ってずいぶん厚かましい人等レベルもちがうし十人十色でやりにくいですね。婦人科や性病を扱っていると世間の裏、人間のダークサイドがよくわかり面白い事や男女間の深刻な面を見せられますよ。

性病の仲裁もして医者稼業
阿茶

と云う立場は始終です。

昔高校生位の人が夢精なんか大変気にしてノイローゼ気味になっておってよく来たものですが時世ですね、近頃はセックスの事が開放的になっている故か、こんな人は来なくなりました。女の子がホテルの帰りに性病と妊娠の予防洗滌をと云って来るのには先生の方が一寸顔まけです。

良子さん

健保の請求書いやですね。
明細書書かぬうちから肩が凝り
阿茶

ですがこれを書かぬとおマンマにありつけないとは情けないと思いませんか。

アプレの人には顔負けですよ。文句が多くてね。ふた言めには権利権利とか言って、この薬がどうの注射がどうのって、そのくせ自分のほうの義務はちょっともやらないのですからまったくサジを投げますよ。

仁術が算術になる世智辛らさ
阿茶

長袖が筒袖になり窮屈な
同

コクヨ便箋

「野球」

（阪急）
黒川紫香

南海の友淵貴山さん、こんにちわ。

年末のデパート合戦がすんだらスグに正月の沿線恵方の乗客合戦と、電鉄会社も忙しいですなア。南海サンには高島屋百貨店、ウチのほうは阪急百貨店と、大大阪の一角ににらみ合ってはいますが、ウチは阪神サンとは向い同士ですからライバル意識が燃えさかっても、おタクとはそうした気持ちがわいてきません。

編集局のねらいはアナタとボクに野球の話をさせるようですな。ことプロ野球となると阪急ブレーブスも小型になりましたよ、イヤ弱くなりましたよ。その点、南海ホークスはなんといってもパシフィックの王者ですからね、まったく野球となると貴山さんの南海には手も足も出ませんよ。

戦前の阪急軍はご承知のように両山下、宮武、堀尾という大型打線で、いまの南海サンがキャッチ・フレーズにしている四百フィート打線の元祖はウチだったかも知れません。

現在の阪急は小型ですが堅実さはあると思うのです。これは小林一三イズムが野球にまでしみこんでいるのだと思います。

小林一三翁が欧州旅行をされているとき、阪神タイガースが誕生することを電報で知らせたら、スグ返事が来ましたね。

「阪神より強いチームをつくれ」とね。そこで宮武等を中心にして出来上ったのが阪急ブレーブスなんです。あのころウチは強かったですよ。

現在弱いのは宝塚の少女歌劇の連中が応援するからだと悪口をたたく人もいますが、まあそういう見方もあるかも知れませんね。勝負師はやさしくなったらいけませんよ。南海サンの鶴岡親分の云う〝ゼニのとれる野球〟をするには、やはり強くならなくてはウソですよ。

少女歌劇が応援すると女性的になるなんてことはないのですが、どうもウチは応援の方もお上品のようです。三十一文字の百人一首から芸名をつけているのでそういうふうに見られるのですね。しかし現在はもう百人一首から芸名をとっていないのです。第一期生の雲井浪子や第三期生の天津乙女なんて芸名はやはりなつかしいものです。ちょっと横道へ外れますが少女歌劇の連中の係りの者は彼女らの名を憶えるのにひと苦労なんです。というのは本名、芸名、愛称と彼女らは三つ名を持っているのですから、三百人もいると九百とダメです。昨年はビリから二番目でボクたちまで肩身のせまい思いがしましたよ。

試合に勝った翌日なんか、ウチの社員の元気がちがいますね、朝からイキイキしていますよ。えらいもんですね、これはファン気質というよりやはり同僚というつながりからなんでしょう。連敗につぐ連敗だと、社員は朝から退社するまでムッツリしていますよ。社内の空気が、野球の勝負でガラリ変わるとこなんか、アナタの方もおそらく同じことだと思います。

おもしろいのは沿線の住民までボクらと同じ気持ちになるようです。阪急が勝つとスポーツ紙が全部スグ売り切れるのです。同じような記事なのに一人で三種類ぐらい日刊スポーツ紙を買うのですね。ところが負けるとほとんど残ってしまうのです。これは沿線に住んでいる〝よしみ〟というヤツでしょうか。

南海サンからトレードされた杉山選手が一枚加わったので、ことしこそ阪急ブレーブスはやりますよ。ウチは東映には強いのですが南海サンにはどうにも勝てませんね。杉山選手をもらったのですから、そのご恩返しにも一矢むくいたいものです。

社内チームではボクは捕手なんです。一度南海サンの社内チームと一戦交えたいものです。では旬会でまたお会いしましょう。

酒清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

電鉄・デパート・野球

（南海）
友淵貴山

阪急の黒川紫香さん、お元気ですか。

編集局からペンの阪急、南海戦をやれというご命令なんですが、正直のところ、南海が阪急さんに勝てるのは野球だけで、あとはみな負けるものばかりです。

キタとミナミに分かれてはいますが、何から何まで阪急さんには勝てませんよ。早い話ですよ、戦前でも阪急さんの宝塚少女歌劇と大浜の潮湯の余興では太刀打ちができませんでしたからね。

紫香さんも野球がお好きだそうですね。いつかの「川雑」の座談会でも拝見しましたが、名キャッチャーという評判をきいております。私は二塁をやっていますが、いまはもっぱらウマのほうです。しかし野球はやっぱり南海電鉄の

眠っている本を

―「短詩文学文庫」の創設―

麻生路郎

★書棚をジッと眺めていると、埃りを浴びて、眠っている本が随分とある。何んな薄っぺらな本でもその当時は全身の血を湧かしてくれたものだ。従って、今、眠むっているからと云って、紙屑屋の手へ身売りさせるのは忍び難い。

★それ等の中には、今なお有用な本が沢山存在している筈だが、それ等の本をブックセルフに眠むらせておいていいものだろうか。こんなことを考えるのは私だけではないだろう。

★しかし、読書子が本を愛する心は、妻子を愛するにも似て、なかなかに執着の深いものがあることは、私のよく知るところである。それだけに、それ等の眠っている本を活きて働らく本にしたいと考えるに到ったのである。

★私は蔵書家の熱愛書を対照としないのであって、既に役目を果たした本や、所有者にとって全く不用とされている本をもらいうけて、一つの文庫を創設し、見たくても見られない人や、読みたくても読めない人たちのために提供し、眠むっている多くの図書に光りを与えたいと思うのである。

★そのために図書館があるのではないかと云われるかも知れぬが、各種各様の部門の図書を充実させることは、いかなる大図書館でもなかなかに至難なことである。

★そこで短詩文学の世界に六十余年を生きて来た私に課せられた問題は短詩文学文庫の創設であった。

★私は、大阪市立中央図書館が、市政七十周年記念事業として、昨年四月から三億円を投じ完成を急がれ、十一月一日に開館されたのを機として、同図書館内に「短詩文学文庫」の一室を提供してもろうことを諮ったところ、全国図書館にも、その類を見ない企画として賛意を表され、直ちに着手することの許諾を得たのであった。

★では、ここで「短詩文学文庫」に蒐集したい書籍、もらいうけたい書籍とは、どんなものであるかを一応列挙して見よう。

第一は**短詩文学**（詩、短歌、俳句、川柳其他）**の古今の書**。（他国語の翻訳書も含む）第二は、それ等の作家の**エッセイ及随筆等の書**。

関係上、南海ホークスの試合があると応援に駈けつけますね。

応援といえば不朽洞会員の阿形一杉氏にはかないませんよ。テレビなどで応援団が映るとかならず一杉氏のお顔が見えます。それから同じく不朽洞会員の辻圭水氏、この人も熱心な人です。

紫香さんのほうと同じように私のほうもナイターには強く、〃夜鷹〃なんていわれています。今の若い人に〃夜鷹〃なんて言ってもわかってもらえないでしょうが、夜の女とはエライ名をつけられたものです。

かつての〃グレート・リング〃が二つに割れて〃南海〃と〃近鉄〃になったのですが、南海ホークスには鶴岡一人という親分監督のおかげで何度かペナントを握りましたが、昨年は御堂筋のパレードができず残念でした。

ことしの阪急ブレーブスは相当なとこまでいくんじゃないですか。うちの当面の敵は東映だとおもうのですが、阪急サンは東映には強いのでことしもウンとたたいてほしいものですなァ。うちのほうはご承知のように主力選手を大量にトレードに出しましたからサテその戦力は、ということになるとシロウト考えでも、ことしは苦難のペナントレースになりそうです。万一ペナントをにぎることができなかったら、鶴岡親分の株は下がりますよ。勝負の世界はきびしいですからね。

私んとこの孫はまだ三才ですが、同じように〃野村サン、ホームラン打ってや〃などといいます。やっぱり南海びいきになるのですね。男の子はみな野球選手にしたいのですがアノ二軍にいる連中を見ますとあわれですね。一軍のスターとはえらいちがいですな。

阪急サンと同じように南海はパに属している関係か、どうもセの方の審判員の不手ぎわが目立ちますね、アンパイやはパの方がだいぶ上ですよ、アンパイやれヨって云いたくなりますね。

川柳の選者も野球の審判員に一脈通じるものがありますが、なかなかむずかしいですな、やっぱり死ぬまで勉強ですな。私なんか最近は怠けておりまして、これが野球なら二軍へ落されてしまっていますよ。

野球眼も川柳眼も同じで遠ざかると球が見えなくなるように、川柳も休むとカンがわるくなるでしょうから、勉強だけはやらないといけないですね。二軍に落されぬようガン張りますかアハハハと笑ったところでサイレンをならして試合終了にいたします。

川柳雑誌社特製
投句用　柳　箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送　料（一冊分）二〇円

★随分欲の深い話であるが、私と趣旨を同じくされる方は本乞食を買って出た私にまで、ご連絡が願いたい。

連絡先は

大阪市西区北堀江御池通五丁目一番地、大阪市立中央図書館内「短詩文学文庫」世話人、麻生路郎宛に、ハガキ又は電話（大阪五一三局〇五五一番）をいただきたい。と云う訳は短詩文学に関する本でさえあれば、どんな本でもいただく積りはないので、多くの重復を避けるための打ち合わせをさせていただき、無用の時間と、無駄な費用等をはぶきたい所存である。

★寄贈をされた本には、一冊毎に誰れそれ氏好意の捺印をして、「短詩文学文庫」に引渡し、私と館長西藤寿太郎氏との連署でお礼状を差し出し、御厚意に対し感謝の意を表する。

★本乞食の世話人である私としては先ず隗より始めよで、私自身所蔵の短詩文学書を漸次整理しながら運んでいる。

★私としては、短詩界の諸賢は云うまでもなく、学界、財界、政界其他各方面の方々にも弘くご協力願って初志の貫徹をスピード化させたいと思っている。

★もう既に、世話人の意のあるところを諒とされて、申込みをうけているので、文庫の公開は意外に早く捗どり四月中頃には閲覧が願えるのではないかと考えている。

★図書館では「短詩文学文庫」のため一階の114号室を既に提供されているので、今はただ、寄贈書の受入と、その整理さえすればよいところまで運んでいる。

★目下、114号室の収容能力は五〇〇〇冊であるが、それ以上になれば更に善処してもろう積りだ。

★お互い日本人はこどもの頃から、短詩文学に親しんでいるのであるから、この文庫を利用するよろこびが、どんなに大きなものであるかは想像に難くないであろう。

★では、眠っている本とはどんなところにあるかを二、三例を挙げて見たい。或る社の社長が、東上の車中で、アタマのレジャーとして俳書を繙読されたとする。目的地に着くと同時に、たいていの場合不用品となるものだ。

又社長が天寿をまっとうされた場合、その趣味は必ずしも未亡人がうけつがれるとは限らない。むしろその一家に趣味の後継者のない場合が多い。と云って、亡き人の遺こされた書籍を、処分することは故人に対して忍びないものだ。こんな場合、亡き人の名によって「短詩文学文庫」に寄贈されたなら、後人がその恩恵を享くることによって、故人の霊も鎮まるのではなかろうか。いささか非礼のきらいはあるが、一例として挙げさしてもらった。

又、その人の生活環境の変遷で従来の趣味から離脱されたために不用となる場合もある。その他いろいろの点から、徒らにブックセルフに眠らせる場合がないとはいえない。そうした本の数々を後人のために割愛されるとしたら、それ等の眠っている本は再び日の目を見て、蘇生する思いがするであろう。

★わが愛する多くの短詩文学書を、心なき人の書棚に眠らせないで、弘く世の人のために、役立たせたらと云う以外に私には他意はないのである。どうかご協力の程を。

☆

續 川柳書架 (17)

末摘花並べ百員全釈

（山路閑古著）

★本書の巻頭、著者の序の一節を抜く。

（前略）古川柳は、句の内容によって、高番・中番・末番の三種に大別される。これは製作当時からの分類であるが、今日もこの分類に従って研究が行われている。

高番句は、新聞でいえば第一面の政治記事のような内容のもの、中番句と末番句は、第三面の社会記事に類するものであるが、殊に末番句は男女の秘事に触れ、売色や痴情を扱ったものが多い。

医学に内科・外科・婦人科などの科目があるように、古川柳学にも右の如く高番科・中番科・末番科の科目がある。而してその末番科が産婦人科に相当するものであるが、学術としての重要性はこれと少しも変らない。但し、扱われるものの性質によっては、その意見は一般に公開なし難く、専門家にのみ発表せられる場合のあること、これ亦両科ともにその軌を一にしている。

本書はかくの如き見解のもとに末番句中の圧巻とせられる「並べ百員」に対して鑑賞と解釈の両方面から批判を加えたものである。行文は読み物風に、つとめて平易に書き流してはあるが、著は学の尊厳を体し、末番句の真を誤まらざらんことを第一義とした。（以下略）

★本書の目次を左に、

序説。第一章—俳諧の発生。第二章—百韻の形式。第三章—月花の定座。第四章—百韻の初頭三句と平句。第五章—俳諧の附け合い。第六章—指し合いと去り嫌い。第七章—恋句。並べ百員評釈。

★昭和卅三年十一月廿日発行。B6版、二六六頁、頒価三八〇円。発行所、東京都文京区大塚仲町三六、有光書房。

★著者は古川柳研究の権威者。

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復ハガキでお問合わせ下さい。

川柳雑誌社

近作柳樽

麻生路郎選

北川春巣選

幸運は後に来るもの汗を拭く　青森県　木村　涼人
芸術と称す女が脱いだだけ　同
枯れすすき時代が匂うスラム街　同
これぽちの金で眠れじとはかなし　同
二二が四を信じてボロい夢を捨て　同
しあわせと云えば倖せ耐に酔い　同
四十には四十の味のバッハ聴く　大阪市　板倉天悟空
成人の今日は親から酌いでやり　同
リバイバルクウデタァまで用意され　同
まだ特価品を上手に買う生活　同
親孝行しないよという子が可愛い　同
女房から離れた背のび旅の空　兵庫県　遠山　可住
雪しんしん保険屋へ降参し　同
ヘチャに生まれて親を大事にし　同
友の鼻あかさんとして売れ残り　同
観光になる山もなく寝静まり　同
下請けのその下請けでめしを食い　福岡市　田口　麦彦
冬の星みつめて恋の前科者　同
ブルーリボン賞へ拍手をして庶民　同
動中の静図書館に覇気が充ち　同
オリンピックで稼ぐホァルの設計図　同
桃咲けど派閥の村の住みづらく　鳥取県　鈴木村諷子
魚屋も今日はパリッと出初式　同
賞品のない賞状の達筆さ　同
死の灰の地球へ衛星また戻り　同
だるそうに待合室の時計鳴り　同
義理でする見合いへ化粧する女　枚方市　宮川　珠笑
背伸びする心が恋をしてわかり　同
もう骨になったと会葬から戻り　同
馬子衣裳思いつ晴着の礼をうけ　同

川柳と個性

直原七面山

個性という字を辞書で引いてみますと「個個の人の特有の性質」となっており、特有とはと再び辞書を引きますと、「そのものが特に有っている」となっております。

そこで、特にとは如何なることかと三度辞書の厄介になってみますと、「とりわけて独得」という解釈が付されております。

では独得とはと四度辞書をひもどいてみますと、「他に類なきこと」と説明されております。

そこで個性とは即ち他に類なき性質ということになります。

川柳界では実によくこの個性という言葉が使われるのでありますが、みんながみんなこの言葉の真意を良く呑み込んで使っておられるのかというと、あながちそうとばかりもいえないようであります。

なぜなら、その言葉の使われる時の雰囲気や、その言葉の前後の事情を押し計ってみますと、どう

職人の僕にスト無き十二月　竹原市　杉原　愛鳩
お産しても辞めるに惜しい二万円　同　同
ピール歯で抜いて乾杯する若さ　同　同
切りかえの出来ぬ頭で年をとり　同　同
利用価値として尚存在す親　兵庫県　河原みのる
孫の数一ィ二ウ三ィとポチ袋　同　同
湯灌するきまりやあらん孫共洗ろてくれ　同　同
初春へ布団をたたむ窓あける　仙台市　平野　光道
家の炊事は祖母にまかせて栄養士　同　同
遭難事故電光ニュースで見る新春　同　同
赤ん坊の真剣ふらふらふらと立ち　玉野市　小谷　仙山
屋台そば寒さをしのぐ音で食べ　同　同
塩いわしふと懐しい麦の味　同　同
招かれた酒核心にふれて来ず　竹原市　大洲大八洲
聟の口探して軽うあしらわれ　同　同
貧しさに慣れしを親として詫びる　同　同
日めくりが壁へ重たい鏡餅　京都市　大久保和三郎
紋付の客へスピッツ吠え止まず　同　同

思い出の羽織が派手な掛布団　同　同
栄養士なるほどという太りよう　兵庫県　斎藤たけお
来客のしわよせ晩にすぐひびき　同　同
着ぶくれて糸のようなからだもてあまし　同　同
ハンガーへ今日の疲れをおっかぶせ　京都市　都倉　求女
初出勤お雑煮だけがお正月　同　同
お正月他人の衣裳も見に出かけ　同　同
嘘ついていても女はなみだ見せ　貝塚市　杉本　一鶴
パパパパとよばれキッスをここで受け　同　同
太陽を見たまえ米ソの区別なく　同　同
デモをやるように初荷の街を縫い　竹原市　山内　静水
エプロンの白元日の妻若し　同　同
倖な賀状夫婦の句が並び　同　同
生涯を終る長屋に菊が咲き　神戸市　波多野美幸
恋人のふところ計算してねだり　同　同
アンテナの高さ揃えて見得を張り　同　同
古里で着ればいいものちゃんこ　今治市　越智　一水
嫁に来てくれる娘もなし段畑　同　同

も、「他のものにまさっている」とか、「他のものよりすぐれている」といった風な時に使われているようでありますから。

もしそうだとすれば、これは個性の誤用濫発だと申さなくてはなりません。

語意からいって、決して個性そのものに、他にまさっているとか、すぐれているとかいった条件は必要ではありません。

即ち、「その人しか持っておらない味」「その人しか詠い上げることの出来ない川柳の境地」「その人しかものにすることの出来ない表現形式」「その人の句にしか備っていない独自の句品」この世には絶対に二つとは存在しないその人だけの川柳の世界。

その世界を描き出す本体そのも

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL(271)6684
御集会には階上御利用下さい

小走りで歩く女の美しさ　同

キリストの生まれし夜を一人いる　豊中市　福増　久雄

議長不在たき火も今朝は淋しそう　同

恐妻の看板出してする浮気　同

いい話まずおふくろを坐らせて　鳥取市　近藤　昭夫

山かげの墓は雷で逝った人　同

笛吹けば踊る男で人気者　高知市　須藤　俊江

しもやけの手にマニキュアだけ光り　同

ばあちゃんの涙嬉しい時に出し　大阪府　見本　泉洋

除夜の鐘時計のネジも巻き終り　同

姑の出勤子供と送り出し　貝塚市　護川　梢月

お正月花だけ豪華な療養所　同

君子めいた群集だけが残っとり　大阪市　西本　保夫

乳母車の買物冬の冷蔵庫　同

婿殿は酔うて寝てると初電話　声屋市　里田一ン十

関西テレビ見学

テレビ見学としよりも咳こらえば　同

人肌の温みこよなく酒愛す　大和郡山市　松本　峰水

禁煙の誓い青空澄んでいる　同

ロケーション終いまで見て風邪を引き　大阪市　藤冨　淀月

流行は男に赤いものが売れ　同

のれん押すような仲居にあやつられ　須崎市　高橋　蟠蛇

再婚の見合煙草もつけてやり　同

妻の機嫌せんたく物のよく乾き　児島市　伊丹柳瓢子

温泉へ未亡人会と云う団体　同

孫を肴にまた飲み直すお正月　大阪市　万代句念坊

屋根直し小手をかざせば時計台　同

残業の影をひきずる月あかり　和歌山県　木下　一休

きもっ玉だけは大きいやせっぽち　同

更年期夫の捨場ない文化　ハワイ　上田　紅渓

オールドミス猫の恋まで邪慳にし　同

電車まで走る凶器の中へ入り　堺市　武田軍治郎

尻押しのサービスもする暮の駅　同

孫や待たん手土産に一苦労　愛媛県　村上　石峰

本
福壽司
心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

のを個性と呼ぶ訳です。

私達がもし、限りある川柳の大地に、己れ自身のみの地所、他の人のとうてい伺い知ることの出来ない世界を、追従することの出来ない境地を獲得することが出来たとしたら、川柳人としてこれ以上の喜びがまたとあるでありましょうか。

実に個性の練磨こそは、その世界への登竜門であり、自己をより高き境地へ誘導する唯一無二の手段なのであります。

そうしてまた私達は、それが師に一歩も二歩も近づくことの出来る玉道でもあることを知らなければなりません。

縦穴を掘れ

川柳の道を研めてゆくのにはいろいろ方法があろうと思います

大学を出て鶏を飼い嫁がなし　同

催促がないから法事ほっとかれ　玉島市　井上旭峯

婿に出すかまぼこ母は厚う切り　同　鵜飼鮎子

成人に世間を気にせぬ決意なり　西宮市

勿体ない勿体ないと年を取り　同

お茶だけですまぬ客だと目の合図　愛媛県　川又庸児

三輪車おやつがほしいユーターン　同　中川晃男

転職出来ず永年勤続して了い　出雲市

足袋白く床に映して舞い初め　同　三宅ろ亭

借り方は卑屈に愛想笑いする　羽咋市

熱弁は新調服をちと汚し　同　岩井千甫

可愛いとほめて我が子と比較する　神戸市

妻の留守しまい忘れた枕あり　同　野口卯之助

悪い奴ほどよくねむる世を嘆き　宮崎市

責任は僕が持つがと頼りなし　同　山田蛙水

男一匹金力に頭下げ　大阪市

釣銭に車掌は鞄の世帯見せ　同

百貨店を素通りして来た金詰り　広島県　山田スミ子

お隣りは口だけと知り腹を立て　同　常岡孝風

嫁の世話しようしようとしてくれず　兵庫県

口答えする娘を母は外で褒め　同　吉田俊和

かねの値ですぐ踏むみみちぃに疲れ　鈴鹿市

迷惑なこと新聞に出た善意　同　目賀芳月

みのらない恋を覚悟でするデイト　岡山県

肩書を泣かして家では風呂を焚き　同　島田雄峯

ええ事がありそう木魚よくひびき　羽曳野市

日溜りで誰はばからず鳩夫婦　同　谷本鈍愚坊

団地での神経斗争疲れきり　笠岡市

小刻みに妻はへそくり出してくれ　守口市　樋口一峯

のむなり酔えと悪友酒をつぎ　松江市　岡崎祥月

失業の父が子守の凧を上げ　高知県　山川勝子

再会の第一声はヨーとオー　富田林市　浅川八郎

イヤリング燦然として未亡人　神戸市　吉田隆史

ガム嚙んで歩く若さが欲しくなり　河内長野市　森本黒天子

が、横穴方式で行くか縦穴方式でゆくかもその分け方の一つではありますまいか。

現代川柳人の作句態度を一べつしてみましても、狭く深くその奥儀を探ろうとする人と、たとえ浅くとも巾広く横に手を伸ばしてみようとする人との二とおりの型に大別することが出来ると思います。

で問題は、川柳家としてそのいずれの道を選んで進んでゆくのが将来為めになるのかということであります。

考えてみますと、どうも芸術と名のつくものの世界では、その道

年末のやりくり内助に任せきり　福岡市　青柳　武
大びらに金の出で行くお正月　大阪府　桐山　清風
転げ込む運を摑んだのが努力　愛媛県　河本南牛史
ほれたとは男でなくて財のこと　和泉市　末田　晃康
割勘と知らず御馳走様と云い　笠岡市　松本　忠三
みちのくの炬燵でビール身振ふいすこ　遠野市　鈴木　二文
虎年の元旦みごと酔いつぶれ　大阪市　出野　耕一
三カ日だけの道具も客を待ち　芦屋市　三上　芙路
鯛のアラしゃぶって汁の味をほめ　津市　嶋野ひろし
叱るのにオヤツをやってから叱り　松江市　岡崎　雪美
負けん気が強いが金釘流を書き　笠岡市　佐内　隆文
蒲鉾も板が厚うて値が上り　竹原市　渡橋　素風

二十才の誕生日迎え

十代のバトンタッチも軽く受け　岡山県　久戸瀬春光
御見舞は他人他人とまだ続き　大阪市　福井　竜昭
洋裁は出来ないミシンは持って嫁き　児島市　守谷秀二朗
通勤のたしなみという週刊誌　石川県　南　伝一

横転の車は呂律がまわりかね　玉島市　田辺　好女
大寅にならないとそにようており　大阪市　中岸　雄水
就職をしたのがつんとして通る　岡山県　鳥取　周甫
スランプは酒さえにがいもと知り　大阪府　米田　美夫
ラッシュアワーたのに老婆へ席を立ち　茨木市　高木繁太郎
寂しいが青雲を抱く子の首途　玉島市　水粉　千翁
やる方がバットですまんと頭下げ　大阪市　吉田　季生
二次会は尻に敷かれた顔でなし　倉吉市　奥谷　弘朗
減税の分だけ余計のむ上戸　姫路市　隠岐　不酔
雨の宿知らないママも暮をのぞき　岡山県　永宗　宗義
特賞を眺めて金網又もらい　金沢市　根上　杏花
ハイティーン生活力の方を取り　神戸市　沢田　恵甫
包み紙汚職ぶんぶんして届き　下関市　藤田　雪峰
オリの虎児のプレゼントだけは持ち　京都市　土岐　無極
高島田張り子の虎のように振り　岡山県　岩道　博
人気者但しお金がある間　岡山市　行吉　照路
伝言板三十分はサバをよみ　八尾市　吉田　専一

を専門的に深く掘り進んでゆくことによってその道に秀で、その道を極め、その道に成功しているようであります。

即ち横に巾広く掘り進んで行ったのでは、とうていその道に練達することは出来ないようであります。

これはスポーツの話でありますが、オリンピックで十種目競技五種目競技に出場する選手のように、そのいずれの競技においても他に秀れた成績をおさめている人も現実におる訳であります。

しかしそういった人は、千人に一人か、万人に一人しかいません。

が、しかし、あなた御自身が、その万人の一人を目ざして多方面に大活躍をしておるのだといわれるのなら、これはまたなにをかいわんやであります。

それにしましても、芸術と名のつくものの本質が、その道を狭く細く深く深く突き進んできわめることにあるとするならば、一応私達もまたこうした道を歩むのが常識ではないでしょうか。

医者に小児科があり、婦人科があり、外科があるように、また画家に洋画家があり日本画家があるように、川柳家もまたそれぞれの道に専門化されて行くのが、法にかなった求道の道のようであります。

新人にもまた旧人にも、私は懸命に縦穴を深く掘るよう推賞して止みません。

古川柳 かあちゃん

東野大八

ブリキ屋の由五郎の細君は、よくできた人であった。二人のこどものいいお友だちであり、日本一のいいかあちゃんであった。

「でもおかあちゃんは、あたいにウソを教えてお金借りに行けっていうんだもん、そのときのおかあちゃんは大キライ」

とこどもの一人はこぼす。

貧乏でお金のちっともないこの一家は、ウソを言ってお得意先で借りた一金千円なりでお正月を迎える。おモチは一人一個すつ、生れてからこのかた、数えるほどしかないあたたかくて白いごはんの日でもある。

「お正月っていいね、大好きサ」

と弟はそういってごきげんだった。

豊田正子の書いた〝粘土のお面〟のこれは筋だが、こんなかあちゃんは世の中にはいくらでもいる。

お人良しで、やりてで、こどもが大好きで、貧乏暮しにも屈たくのない明るさ、これがかあちゃんの理想像だ。

女房なんていうのは顔や姿形だけでもらった奴にかぎって百年の不作を独りで引きうけたような亭主になる。

かあちゃん、あいよ、この生活のナマなかけ合いがスムーズにいっている家庭は、よしそれがどん底の暮しであっても、一家中おたがいが健康なかぎり天国だ。

女というものは、嫁げば亭主と一つになる。親兄弟より問題なく亭主ビイキになってしまう。しかしこどもが出来ると亭主は二の次になってしまう。亭主を忘れたのではなく、夢中になるこどものため、亭主が自分に同化してそれが二つに分かれて生きていく影のようなものになるからだ。

一方亭主も亭主で、女を見失ったような女房でも、居てもらわねば困るのである。元気で口やかましい女房だから家のことはまかせて安心して外に出られるのだ。

ワイフ、家内、女房、サイ、かかあ、山のカミ、お多福、すべたこれが女房殿への世の亭主族がよせる愛称である。

上品でも下司でも、世間態の上でも呼び方はまちまちだが、その本質にかわりはない。日本政府に登録してあることだし、あだおろそかなつれ合いではないのである。

母の日があっても父の日のないのがおかしい、とぼやくおやじがよくいる。そんなおやじは案外恐妻家ハダで、いつのまにやら尻にしかれている連中だ。

「なにいってんのさ、一年中父の日じゃねエかよ」

そうやりかえすかあちゃんこそこどもにも亭主にもかけがいのないかあちゃんである。

「いまどきの新しい川柳はどうも頂けませんね、ザアます夫人がいいキモノでPTAの集りに出たようなもんで……」

と近所のおっさんが、年初めのお日待ちのより合いでこう率直な感想をのべた。

「その点古川柳はいいな、かあちゃんと宿六式なちかな人のぬくみがござんしてなあ」

と別の一人も同感の首をふった。

古川柳の味合いが、リクツぬきにそんな形で一般人の間でハッキリと頭にのこっている。これは人間自然ののみこみ方だろうが、抵抗は感じない。かえってこうした人たちの気のおけない話をきくと、ついこちらもニッコリとしてしまう。

実のところ、このぼくとてもだんだん馬齢を重ねるだけのことと て、一年毎に頭が単純化し、肩の凝らない世間ほど身についてくる感じがつよい。

うちのかあちゃんも同様で、豊田正子流のかあちゃんに年毎に接近しつつある。

―とうちゃんの腕でかあちゃんしなびてい

というような古川柳があったのを記憶する。イナセなはりものを彫った下町の兄哥が、その腕に浮名流した相手の名もきざんでおく。その腕も今はしなびて、女の名もしぼんできた。その名前の持ち主こそ、水気のないへちまのようになった今の女房だ。彫りものに限らない、夫婦の肉体も同様なことがいえよう。

「新しい連中が、何んとおっしゃろうとおれはおれの古風な川柳を死ぬまで楽しんで作っていく、それでいいじゃないかよ」

故西島〇丸さんが、かつてぼくにこういわれたことがあるが、腕のホリモノのように、〇丸さんはものごころついたころからの川柳とは肉体とともにしなびていくことに無上の誇りと生甲斐をもっていられたらしい。伝統的通俗も仙境を帯びれば柳禅一如の妙趣がでてくる。結構三昧だとある日のぼくは敬服もしている。

しかし、こんなことを思いながら風呂に入っているときまって大きなクシャミが出た。ぼくは晩酌が一パイ入るとヌル湯が好きになる。ヌル湯に入るとすぐ川柳がアタマへくる。そうなるとフロは尻から冷えてくる。これは身体に毒、ついにはハクションとなる。このクシャミのもとはもしかすると川柳ではないのか、と首をひねることがある。

更年期になると男とてやっぱりどこか話がくどくなるものらしい。

ごめんやす。

とけ込むということ

中島生々庵

今夕は柳話の順番が私に回って参りまして、暫らくの間お耳を汚し御迷惑をおかけします。柳話と申上げる程の材料もありませんが最近身近かに見たり、聞いたり、考えたりと云うものを、小鉢料理でも並べる様にして、責を塞ぎたいと思います。

先月十三日夜の新春句会で路郎先生が、この壇上から私達に贈られたお言葉は「何事にもとけ込む事だ。職域だろうが、趣味だろうが、恋愛だろうが、熱情を以てとけ込め。そこには必ず君たちの「いのち」が見出されるのだ」と云う事でした。私はその夜句会を終えて十時の汽車で東京に立ったのですが、先刻聞いた先生の御教訓が強く頭に蘇って来て旅馴れた寝台も眠りにくく目がさえて終いました。御高齢の黙平氏のことやら、静馬さんのこと、熊本の田中女史の随筆新著のこと等を骨組にして、烈々と説き来り説き去り、最後に、短詩文学に対する日頃の念願が漸く整備せられ近き将来その一大企画の一部を発表する運びに至った旨を述べられ、先生自身が信念に向って「とけ込んで来た」生涯の情熱を、新春劈頭ぶちまけての叱咤激励のお言葉で、満堂の出席者が思わず襟を正し、覚悟を新たにしたあの光景が眼底に灼きついて消えないのでした。

世の中の報道や、出来事等少し注意して見て居ると、殆ど毎日の様に心打たれる様な事実が私達の身辺に起って居ります。世の名人名優と云われる人、大研究家、大学者と仰がれる人の殆ど凡てがその生涯を信念に打込み、とけ込んだ人々だと云っても過言ではないでしょう。私はこの正月からの僅かの間に私の身近かで見聞した実例を申上げて見たいと思います。

一月十二日の宮中歌会始めの式典に、晴れの入選者として参列した、坂井慶任さんのこともその一つでありましょう。新聞紙上等で承るところによると、小菅刑務所の粗末な官舎で白い寒菊の様に凛々しくあらゆる運命的な悪条件を克服しながら、而も自分自身を大切に、温め育ててゆき、かたわらには、憎しみや、ひがみや、劣等感や、悪の渦巻とでも云える刑務所の中に職を奉じ、社会から隔てられた不倖せな千五百余人を相手に、慰め、導き、そしてその中にとけ込んでゆく坂井慶任さんであります。こう云う方のこう云う話を、世の中にはびこるマスコミ目当ての根なし草の輩は、どんな気持ちで聞くでしょうか。私自身も省みて恥しい思いで一杯であります。路郎先生のお言葉の様に近ごろ詠進者のレベルが低下したと称せられる中に、坂井氏の如き人物が発見された事は力強い限りだと思います。

一月三十一日私は文楽の初春興行を見ました、演しものは平凡で幾度もお馴染みのあるものばかりでしたが、新春と云う気分もあり又このところ引きつづき「とけ込め」の路郎先生のお言葉が頭に充たされて居た折柄であったからでもありましょうが、語る大夫さんや人形師の真剣さがひしひしと胸に迫って来るのでした。その中でも新聞も賞めて居りましたが竹本春子大夫の出来ばえは殊の外すばらしく、本朝廿四孝の十種香の段より狐火の段までしたが、その又白狐をつかう桐竹亀松の妙技が一段とさえかえり、すっぽんからせり上がる白狐が亀松か、派手な色彩の衣裳の亀松が白狐か、神技と云うものはこんなものを指すのだろう。路郎先生の情熱をもってとけ込めと云われるのが、将にこれでありましょう。

先刻から申述べました通り、先月の路郎先生のお言葉以来、殆ど毎日の様に頭の中の大部分を占めて居たのが、この「とけ込め」でした。ところが或る時一寸私の頭をスッと暗い影の様なものが通り過ぎてゆきました。それは、とけ込め、とけ込めと云っても競輪や、競馬や、パチンコにとけ込むのはどうなるか。悪酒に酔ひしれる、邪恋に身を投げ込む。これはどうなるか。無論私は私なりに、道の善悪判断位は出来て居るつもりなのですが、こう云う機会に考えて見るのも無意味ではないと思いました。つまりとけ込むはとけ込むにしても、自分と云うものを見失なわない事、自分と云うものを正しく育ててゆく事、こう云った様な信念を情熱と共に兼ね備えたとけ込みでなければならないのではないか。不敏な私の頭で私なりの論理を一応たてて見ました。然し今一つどことなく釘が一本足らぬ様な感じもするのでした。この私のもやもやに対し快刀乱麻の解決をして、力強い釘を打ち込んで呉れるものがありました。

それは朝日新聞の一月十五、十六、十七と三日間連載された「ある日の公田連太郎氏」と云う記事であります。恐らく皆様の多くの方がお読みになって居られると思いますが、八十七才の老漢学者公田連太郎氏が、ひっそりと住いなされる東京都品川区の或る細い路地奥に訪ねた森本記者の記事であります。こんど輝かしい朝日賞を受けられる迄は、世間にあまり知られて居なかった大碩学であるそうであります。いろいろ承って見ると、自分の信念に向って情熱を以てとけ込んでゆくと云う点では将に最高峯であることが知られます。森本記者に答えて居られるその記事の中に「世間に認められるとか、社会的な地位を得ると云う

句会の珍客 三巨頭

後藤梅志

交通事故に明け暮れる都会とその騒音の中で、川柳を作句することは、いくら好きな道とはいえ困難さを感じる。まして徳義心とか、公衆道徳というものが失われつつある現在の環境では、優れた作品というものは得られそうにもない。

作句に生命をもとめるということより、むしろ吾々は、人間性を呼び戻すことにまず努めるべきではないかとしばしば考えた。吾々は川柳を愛好するだけ、吾々が住むこの世の中が、好ましい人で満されることを望んでいる。少くとも、この川柳というものを以て交る川柳家同士は、小さな反目や、流派的の根性を捨てていい環境を造って行きたいものと考えていた。

ことに何の興味も示さないが、逆に世を捨てたり、世を逃れたりするのは快しとしない。人間として大事なのは、やはり世間につくすと云うことだ」とありますのが非常に私の心を惹きました。そして又次の様な言葉もあります。「竹林の七賢人などといいますが、あの貴公子たちで、ウマイことばかりいって大した人たちではありませんな」

私はこの公田先生の徹底した情熱をもっての打ち込み、とけ込みそしてその中に、はっきり自分と云うものを見失なわないで育て上げる尊いお姿を私は非常に感激致しました。

「仁でも、義でも、礼でもよい。どんな仕事をしていても、結局はひとつに還元できなければいけない。「一」以てこれを貫く。これだ」と云われるのです。

ここで森本記者が「その「一」とは何であるでしょうか」とお尋ねすると、先生のお答えは冷厳そのものであります。

「まあ、誠でございましょう。」

（本社二月句会の模様から）

これは誰れしも考えることで、しかも非常に困難なことである。ところが、それが必らずしも困難ではないと感じさせる、近頃はほえましい情景に私は出会った。

×

十一月五日は、明和川柳研究会の定例句会当日である。私はこの明和の句会へは毎月欠かさず出掛けることにしているが、この日も定刻の一時を一時間も遅刻して、会場の甲子園二番町の本城弦月さん方（ここは臨時会場で例月の会場である鳴尾公民館のすぐ近くである）へ到着した。

すると意外な珍客があった。川雑の路郎師・ふあうすとの紋太師・それに川柳文学の塊人主幹がお揃いで、しかもめいめい苦吟中である。私が驚いたことは、紋太師や塊人さんが作句するのは珍らしくないが、路郎師が句会でみんなと一緒に作句するなどということは、出会ったことがない。これには驚ろき入った。どうして三人がご一緒になったかというに、これは美談に属するのだが、過日の西宮市民文化祭川柳大会に、明和の河相すゝむさんが実によく世話をされたそうだ。そのお礼ごころに紋太さんが来られ、塊人さんが来られた。そこへ路郎師が、阿倍野・にしなり句会の次に明和をえらんで来会されたという訳である。

全部合せて十二三人の至って小人数ではあったが、和気あいあい裡に披講が始まった。

紋太師は、披講に先立って、「誰れかの説に、人間と呼ばれるものとは、人と呼ばれるものとは、その働らきや何かの点で少しく違ったものがあるそうだが、私の昨今は誠に忙しく、しかも窮屈で心にゆとりというものがない。段々年をとって来て、単なる人としてだけの働らきに終りそうなのは残念のようだが、これも如何ともいたしかたがない。しかし心の底では、人間らしく振る舞い、好きなことをのびのびとしてみたい、という欲求は人並にある。」という要旨で、しみじみとした述懐をされた。

路郎師はまた、「自分は近年柳人達のお世話をする立場に立ち、雑誌の仕事から、原稿講演、様々な句会への招請などで好きな句を忘れていたが、今日はのびのびと皆んなと一緒に句を作ってみた。各題とも三句ずつ正直に作ってみたが久しぶりに作句の面白さを味わった。これからも作家としてどこまでも立って行きたいと思う」と、全く同じような心境を語られた。

長年にわたって人のお世話をして来た点に於ては、両師ともかわりがない。如何に〝お世話する〟ということが骨が折れて六ヵ敷いかということを期せずして両師とも、違った言葉で語った訳であって、これは自由な立場に立つ柳人諸君によく味わって貰ってもよいことのように思った。

また今日のように、珍らしい出来事、すなわち、小集句会で三人の老大家が膝をつき合わせ、車座になって無心に句を作るということなど、誰れが予想したであろうか。明日のことは全くわからない、という事実を私は染々と味わった。

（豚を丸焼きにする若者たち）

ハワイ土人料理

豚の石焼き

築山快夢起

ハワイ土人の祝宴会食の催しをルアウと呼び、それに出す料理献立中に必ず無くてはならないカルア・ピッグと称する豚の丸焼がある。これは大地を適当の大きさに掘り、丸石の手頃なのを集めて薪木で高度に熱し、豚の原形のままをこの焼石で囲んで、上から土を覆い六七時間石焼にするので、極めて原始的な料理法だが、とても美味しく頂けるので好評である。

僕は此処へ来て既に半世紀になるが、その殆んどをホノルル住いをやって来たので、この豚の丸焼の現場など見たこともなかったが、今冬休暇を得てカワイ島のワイメアに滞留中、見学の機会があったのでこれ幸いと行って見た。

此処は人口三千余りの砂糖耕地中心の静かな町、その大部分が日本人であることも、ハワイ州各地と同様で、このややもすると時代の波に取残されるかのようなワイメアも程近いマナにミサイルの試験所が出来たので、此処に通勤する米人技師たちの住宅問題が起り、この要求に応じて新築されたのが、土地の香川請負師所有のアパートメント丁度その日が新築落成祝と云うことで内外五六百人がルアウパーティに招待され、僕等夫妻もその席に列したわけである。ルアウ開会は六時半と云うことだったが、その日の午後二時頃カルアピッグの仕度をするが見に来ないかと云うので早速8ミリを持って出掛けた。見ると広場の一隅に直径二十呎位の土饅頭が出来て居り、そのそばで日本人系や土人系の屈強な若い衆が木蔭に涼をいれてビール機嫌の馬鹿話で賑っている。聞けば火を起したのは前夜の三時半頃で、丸石が灼熱するまでに五時間はタップリかかる。そして今朝の八時半に三頭の大豚（何れも二百斤以上の）を持ち込んだのだから完全に焼けるまでには六時間を要するわけだ。

丁度僕が馳せつけた時が、あと三十分もすれば出来上ると云う頃合であったのだ。

聞いたままに、この料理法を説明して見ると、まず薪木を充分燃して丸石を高度に熱し、一方豚の係りは臓物を綺麗にして全部の肌毛を剃り落し、それからバナナやティリーフの葉や茎で全体を包み腸の中へも手頃の焼石を入れて、穴の中へ持ち込むと、その次には豚の全身が焼石に囲まれるわけだが、豚の出来上りの際の肉が、ポロポロにはずれないように、鉄線網で取巻かれ、その上から撒水した厚地のテントにでも使ったような布地でかぶせ、それへ土を充分にかけて土饅頭のようにしておく。

時計を見ると二時半だ。それっと許りに七八人が手にスコップを持って土をのけて行くと、中から水蒸気が濛々と上ってくる。キャンバスをのけ、バナナ葉や茎を取去り、焼石を一つ一つ取って行く、この焼石をはさみ除ける道具もあったが、馴れたのは水に手を浸しては、じかに熱いのを摑んで向うへ投げ投げする手際のいいものもあり感心させられた。

最後の鉄網をのけると其処には好い具合に焼けた豚が三頭も並んでいる。何れも丸々と肥え太った立派なのばかり、数時間前まではこんなことになろうとは露知らず呑気に鼻を鳴らして居たのであろうと思うと気の毒になった。

カルワにはなるとも知らずよく太り
引導も受けずあわれやこの姿

この現場見ては食指も動きかね

何と云っても一つ二百斤以上もあるのが三頭、それが石と一緒に高熱化しているのだから、豚を穴から取出すまでが少々の手数ではない。若衆たちは全身汗だくだくになって之を始末したのだが、都合のいいことに、全身に火が充分通っているので脚などは引けば胴から楽にはなれるし、間もなく全部が用意の大箱の中に移され、それからは十人許りが総がかりで肉を小さくほごしにかかる。はずされた肉は塩を適度に加えた水に味

現代柳人錄

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（105）**山路閑古**（やまじかんこ）

（一）萩原時夫（はぎはらときお）（二）山路閑古（三）——（四）東京都太田区石川町一六八（五）明治33年10月13日（六）静岡市（七）教師（八）——（九）**羽子板の押絵の中に豆絞り**（一〇）俳諧・俳句（一一）有（一二）大正十三年一月久良伎社入門

（106）**木幡村雲**（こばたむらくも）

（一）木幡勝蔵（かつぞう）（二）村雲（むらくも）（三）菊影庵（四）大阪市生野区舎利寺三ノ六二（五）明治26年1月28日（六）島根県（七）木彫刻（八）——（九）**モカとならとけて悔なし角砂糖**（一〇）ナシ（一一）有（一二）大正十三年

（107）**松尾馬奮**（まつおばふん）

（一）松尾庄次郎（しょうじろう）（二）馬奮（ばふん）（三）——（四）青森県三戸町（さんの

の素（昔はこんな便利なものはなかったであろう）を加えた中に浸され、こうして出来上ったものが大皿に盛られて、ルアウの席に持ち出されたのである。

それから書き落したことは、石焼にする時に馬鈴薯（ポテト）が中に入れられ、これが豚と同時においしく焼けて食卓に出されたことだ。

ついでに当夜のルアウで御馳走になった献立中カルアピッグ以外のものを御披露に及ぶと

一、ポイ（里芋によく似たタロ芋をスリ芋にしたもので土人にとっては米の飯同様の主食）

二、ロミロミ・サルモン（鮭を小切に刻んだものへ、玉葱、トメト、青葱を交ぜたもの、ロミロミは土語で揉むの意）

三、チキン・ルアウ（鶏肉をココナツ汁、タロ葉と料理したもの）

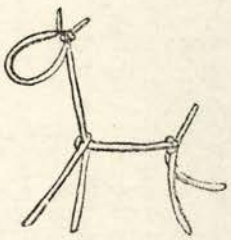
四、ハウピア（ココナツ汁をコンスターチと砂糖、ミルクで煮固め羹カンの様にしたもの）

五、オピヒ（海岸の岩礁で採れる田螺のような貝でリムと称する海草と共に食べる）

六、オペルの塩もみ（鰯に似た魚をサイの目に刻んで之を荒塩でもんで出す。）

で余興にはワイメア高校有志の四部合奏（ピアノ、ザイロフォン、ウクレレ、セロ）や隠し芸で賑わったが、大抵のルアウではフラ踊りや、土人絃楽で賑やかな一夜を過すのが例となっている。

みち



戸田古方

豊川の流れは湯谷あたりでは所々で淀みをつくっているだけですが、流れを下った新城の町あたりではもう船を浮べることのできる深さとなっていました。新城は愛知県庁の地方事務所などある一寸した町ですが、その昔から山国と平野との物資の交流点だったということです。そして、ずっと下流の豊橋に近い、国鉄や名鉄の鉄橋のかかっているほとりには古代歴史の第一頁ともいうべき弥生式の遺蹟瓜郷がありました。もう一つ古い縄文式文化時代から弥生式文化時代へとすすんで、文字通り日本の黎明期となるのです。日本は大陸に近い島国として、弥生式時代に大陸から水田耕作という、その頃としては革命的生産の様式を学びとったのでした。そして、国土と生活が本調子にかたちづくられて来たのでした。日本という国は国土のかたちや、こうした環境のなかから、その歴史を発展させて来たのでした。

また、日本の近世をうみ出した信長、秀吉、家康の三人が三人ともこの濃美平野から出たのも偶然ではありませんでした。濃美平野には木曽、長良、揖斐の三つの大河が流れていますが、下流では、昔から水とのはげしい斗いが繰返えされ、そして他の部分では、明治用水や愛知用水が必要なほど水不足になやんでいたのでした。そうした、洪水と旱魃という自然との斗いの中から、負けじ魂の権化ともいうべき三傑を産んだといわれています。何んでも原因はあるものです。火のないところに煙は立たず、蒔かぬ種は生えません。

現に、日を重ねてきたわれわれの東海道のバス旅行も、バスにのっているかぎり、全く昔をしのぶよすがもありませんでした。

その原因に素直に順応して生れた三傑。バスにのれば素直にのって素直に見えるものを見ることです。そして、歩いているわたしは素直に歩くことよりしようがありません。

一瞬の立ちどまりにしては、ちと長すぎる回想でしたが、自然足が動きだしていました。とむこうの立木のしげみの中で人声がきこえて来ます。いよいよ来たのかなと思いながら、石段になったところにかかりました。その人声は私をまってくれていた九人の人々のものでした。

階段でいうなら踊り場みたいな平地が石段のつきたところにありまして、片影に石仏が二つ三つ苔の中に立っていました。

九人は石のかけらを手にした一人を中心に盛んに話の花をさかせていました。その石は適当に苔をつけた、素人眼にもはしいような美しいものでした。（つづく）

☆　☆

大万川柳ベスト・10へ
山川阿茶さん進出

☆　☆

古稀近くなっても深紅のバラが好き　阿茶

こういう句をものにされた阿茶さんだが、なかなかどうして、まだまだピチピチとした若さで、この人が還暦をすぎた歳だとは誰もおもうまい。

「気持だけはいつまで経っても若い」とは世の老人たちのキマリ文句だが、それは自分がそう思うだけで、やはり大抵の人は気持ちまで老いこんでいるものである。ところが阿茶さんにかぎっては「いつまでも若い」で、とおる人である。

その闘志とその知性でことしも大萬川柳のベスト・10に選ばれたことは、婦人友の会のためにも万丈の気をはかれたものである。

内藤きさ子さんは第11位だったがともに選者進出の可能性があり霞乃先生はご満悦である。（F）

へまち）（五）明治19年3月15日（六）青森県（七）信用組合専務（八）三戸・六五四番（九）**不善とは行かないまでも旅の宿**（一〇）謡曲は五十年（一一）無（一二）大正八年頃

（108）**大野木真砂**（おおのぎしんさ）

（一）大野木正蔵（しょうぞう）（二）真砂（まさご）（三）——（四）神戸市灘区灘浜・神戸製鋼所清水建設ＫＫ内（五）大正7年3月1日（六）京都市上賀茂中大路（七）土工（八）㊽六二五六番（九）**背徳を煽る笑顔の如才なく**（一〇）旅行（一一）無（一二）昭和二十五年頃

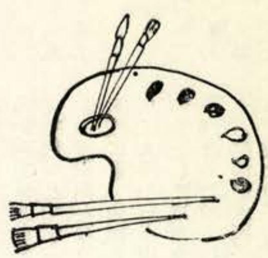
（109）**岸南柳**（きしなんりゅう）

（一）岸作太郎（さくたろう）（二）南柳（なんりゅう）。南北先生より受ける（三）——（四）大阪市阿倍野区天王寺町北一ノ一八（五）明治21年4月1日（六）福井県大野郡（七）理容師（八）「731」六二八七番（九）**人生に因縁というよい言葉**（一〇）写真と魚釣（一一）有（一二）大正十年・当百先生より習う

（110）**真鍋一瓢**（まなべいっぴょう）

（一）真鍋静夫（しずお）（二）一瓢（いっぴょう）（三）——（四）大阪市浪速区塩草町一一五六（五）明治43年3月15日（六）岡山県児島市（七）会社員

句評リレー



大阪市　西いわを
東京都　阿部佐保蘭
長野県　高峰柳児
大阪市　長谷川三司
宇部市　津秋六花

羨ましセーヌ河畔の古本屋　晃

いわを—「羨やまし」の上五句を主体とした句主の本心をズバリ唄ったと云う外はない。強いて内察すれば句主の環境とセーヌ河畔と云うコントラストをきっぱり云い切った点に将来へのイメージを画いているのではなかろうか？

佐保蘭—察する処句主は本屋さんで、同じ店を開くなら夢に描くセーヌ河畔でと云う処か。欲を云えばセーヌ河畔の古本屋が羨やましいと云う我が思いをそのまま詠っただけでも一つ苦心の跡が見られない。上五を〃夢に見た〃とでもして見たらどんなものか知ら。

柳児—セーヌ河畔と言った大きな構想を主材に、ともすればおき去られたような存在の古本屋の静寂な境地、そのいずれもがしんかんとした味を捉えて織りまぜている。ただこの句の場合これを観賞に訴える時、セーヌ河畔の姿を見聞の少い階層にどの程度の消化に問題があり、そうした意味で現実性に難がある。

三司—なる程古本屋さんの羨やましがるような事柄だが、私には絵ハガキで見るセーヌ河畔の絵ほどの感メイもない。句主自身のイメージも静寂な境地もこの句からは受けとれない。罪は上五にあるのではないかと思う。直すとすれば月並だが佐保蘭さんの言う「夢に見た」の方がまし。ただそれだけのもの。

六花—私の視野のせまいせいでもあろうが中七のセーヌ河畔が一寸気に入りません。私も人生の半分を外地で暮した者で外地を入れての作句もしますが決して発表しない事にして居ます。やはり川柳は誰にもうなずける句でないといけないのではないでしょうか。

いわを—単なる情景詩ともとれるが、本心からセーヌ河畔を夢に画いている羨望の意慾心を表現していることともとれるが、写生的な場合とすれば、柳児さんの云うセーヌ河畔の姿を見聞の少い階層に云々と云うことが批判される。

佐保蘭—御説の通り写生吟ともとれるが、パリを知らぬ筆者には想像だけで自信のある句評は出来ない。昨秋欧州からアメリカを旅行した柳友から、その旅行吟の批評を求められ閉口した苦い経験がある。いい句を作ることは難しいが、いい句評も場合によってはそれ以上に難しい。今思いついたのだが、句評が一巡した処で句主に登場して貰うのも大変参考になっていいことだと思う。

柳児—上五を具体的に表現して中七に至って吾々には全く夢想であり、句主は或はこうした視野の狭いことを嗤うかも知れないが、その場合それに甘える。

三司—句主の夢にして置きましよう。セーヌ河畔の枯木にカンバスを立てかけて道行く人々の観賞にまかし何がしの金を得ようとする貧しい画家、その横のささやかな古本屋。おりからの北風が砂をまじえて列べた古本屋のページが音を立ててめくれる佗びしさ、そこに詩がある。

六花—句主も案外セーヌを知らず三司さんの言われるように夢であり希望でもあるような気がします、とすれば此の場合これで良いのではないでしょうか。只句意の難解なものは好んで作句すべきではなかろうか。

続・西成界わい

働いて儲けた金と書き添える　満潮

いわを—誰しも働かねば金を儲けられないとは熟知の上乍らも、「西成界わい」と云う環境は盗んだ金とみられんとも限らない。そんなところを「書き添える」と結んだと云わば句主の綿密さがうかがわれる。

佐保蘭—綿密さと云えば、その綿密さをもう一歩進めて手紙を出した相手の人物をはっきりさせて貰いたかった。この句だけではその点があいまいなので、例えば病む母へ出した手紙の場合と仮定して、上五と中七を〃病む母へまともな金と〃とでもしてみたら句主の詠わんとする気持と遠ざかるだろうか。

柳児—釜ヶ崎の騒ぎを特に本誌を通じて知識を得た。こうした社会の体臭が大写しされ、句の内容はこの社会にある特異な性格を端的に現わしている、儲けた金に触

（八）〔561〕八三八六番（九）**しなびても土竈袴はつけていた**（一〇）——（一一）有（一二）昭和十三年

(111) **野村味平**

（一）野村進（のむらすすむ）（二）味平（あじへい）（三）一壺子（いっこし）（四）石川県加賀市大聖寺永町一五〇（五）明治38年6月26日（六）石川県加賀市大聖寺本町六番地（七）信用組合得意先係（八）——（九）**春雨にショボショボとドサ廻り**（一〇）魚釣（一一）有（一二）昭和九年頃

(112) **小池鯉生**

（一）小池理一（こいけりいち）（二）鯉生（りせい）（三）五十嵐公太（四）埼玉県浦和市北浦和町三丁目三（五）明治40年11月7日（六）神戸市葺合区（七）鶏卵商（八）浦和・四五四一（九）**流れ者只の鼠でございます**（一〇）書道（一一）有（一二）大正十二年

(113) **長谷川鮮山**

（一）長谷川源吉（はせがわげんきち）（二）鮮山（せんざん）（三）——（四）名古屋市西区米田町一六（五）明治35年4月23日（六）愛知県（七）飲食業（八）(54)九〇四五番（九）**よろこびを分つ食卓酒がちり**（一〇）——（一一）有（一二）昭和二年三月

(114) **木口賀峰**

れて「西成界わい」に生活する階級性の動きをまとめて、人間味のある良識を指摘して生彩となっている。

三司—働らいて儲けた金と書き添えねばならぬ必然性がこの句からはうかがえない。ただ西成界わいとあるのでヤヤ救われて居る。西成と云う特異な環境に住む人間性の弱さと云うか、特にこう書かねばならない差出人の過去の性格を少々は覗かせては居るが。

六花—西成に住んで居ると云う事が本人には肩身狭く思えるのだろう、こうした気持ちが働いて儲けた金と書き添えたのである。西成界わいとしてなかったら佐保蘭氏の言われるように相手をはっきりする必要がある、例えば改心をした息子が故郷の親にと云うふうに。

いわを—「西成界わい」に住むがために「儲けた金」と書き添えねばならぬこともないが、特に書き添えねば、気が、すまぬところに過去に何かがあったのではなかろうか？構想を縮めてみると六花さんの云う改心をした息子が、故郷の親にと云うことも考えられるが。

佐保蘭—前書附の句は生命が短かいと云われている。前句附の中から一句で句意の判るものを集めて柳樽が編まれた例もある。前書のある句も結構だが、前書を切離しても句意のよく誰にも判然する句を心がけるべきではなかろうか。

柳児—とにかく過去にある生活態度の暗さを盛りこみ、そして現況にある明るさをいささか訴え、かつ反省の温味を示している。

三司—満潮さんや晃さんの川柳塔の「続西成界わい」を今まで拝読さしてもらって居ますが、内容のある句が少ない。特種な隠語のラ列や、写生に終って西成の特に釜ヶ崎が上わ辷りして居ます。この句はその中でもやや内容のある句と見たが、皆さんの批評でつきています。

六花—佐保蘭さんの云われるように前書きを切離しても良く判る作句であって欲しいですね。西成に住んでいなくても過去に暗い影が感じられるような気もします。こう見て来ますと下五書き添えが効いて一応人間味のある句と感じました。

（担当・真鍋一瓢）

続・川柳料理暦（完）

水谷竹荘

おぼろ月夜に煙る春の宵のやるせない想いを浅春の晩酌にふさわしい料理で、充分に味わうことは楽しいものである。

といっても、お酒というものが多分に、気分的なもの、特に日本酒では季節感を大切にするものであるから、梅の季節には、梅の花の一輪を、さりげなくお皿にあしらったり、庭先の垣根にそって茂ったみよがたけの蔭に渋紅色の芽をみつけては、それに粒味噌を塗って、焼きたてをすすめるといったような、デリケートな心づかいが欲しいものである。

庖丁の冴えがのれんとコイさんと　越舟

日本料理で酢のものが出ると、もう会席膳も終りである、あとは果物か、ブブ漬けというところ、川柳料理暦も今月で終るので、酢の物について色々書くことにした。

酢のものが好きな人には、やせている人が多いのが面白いと思う。

献立へ文句が多いやせっぽち　弘道

きうりもみ好きな父さんやせっぽち　恵二朗

やせっぽち茶漬一番好きと言い　雄水

酢のものいろいろ

酢のものとは、魚貝類をはじめ野菜類など、いろいろな材料に、各種の合わせ酢を使って調味したものである。だから一番大切なことは材料と合わせて、酢のとり合わせかたで、この配合がまずいと折角のものも台なしにしてしまうことになる。

それから、酢は早くからかけておくと、酢味が滲み、まずくなる。魚などは身が白くふやけて新鮮さがなくなり、その持味を損じる。又上からかけると、美しさを損うから、横から注ぐようにしたらよい。

次にのべる合わせ酢は、あくまで一応の基準であるから、その材料によって好みに応じて加減することが必要である。

甘酢　酢大匙4杯、砂糖大匙1杯、塩小匙半杯、味の素少々

ポン酢　だいだい大匙5杯、醤油大匙5杯、たまり醤油大匙1杯、味の素少々。

黄味酢　三杯酢カップ半杯、卵黄4個

白酢　豆腐半丁、甘酢でのばす。

みぞれ酢　大根おろし二杯酢又はポン酢に合わせる。

吉野酢　三杯酢大匙4杯、吉野葛小匙1杯を三杯酢で溶いて入れる。

味噌酢　粒味噌と甘酢を合わせる。

うに酢　うに大匙1杯、卵黄2個、だし大匙1杯、三杯酢大匙1杯。

庖丁の捌き年季の味を見せ　蜻蛉

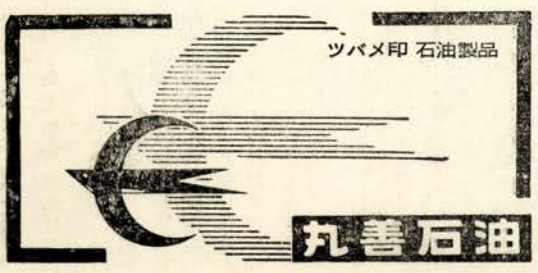
庖丁へ年季を見せる豆絞り　和三郎

庖丁一本年季を積んで旅を終え　井蛙

（一）木口文雄（きぐちふみを）（二）賀峰（がほう）（三）閑城（かんじょう）（四）吹田市松ヶ鼻一一三七（五）大正11年3月15日（六）岡山県総社市久代（七）会社員（八）「381」七五一〇番（九）**一合の酒　人間を男にし**（一〇）謡曲・詩吟（一一）有（一二）昭和二十八年

（115）森本黒天子（もりもとこくてんし）

（一）森本力松（二）黒天子（三）——（四）河内長野市西代町三〇一ノ二（五）明治26年11月6日（六）大阪市南区日本橋五丁目（七）会社員計理（八）——（九）**やめさすかやめるかの椅子守り抜き**（一〇）観劇（一一）有（一二）大正六年



週刊誌あれこれ

金井文秋

街を歩いていても、電車に乗っても、週刊誌を持っている人にかならず出合う、なぜこんなに週刊誌が一般大衆に普及されたのだろうか、それにはいろいろの理由がある。今より数年前全国に貸本ブームが起った、一冊の雑誌を読むのに十円や十五円で読めると云うのと保証金がいらないのが大きな魅力であったらしい、それによい内職になると、マスコミまで騒いだ為でもある。

慌てたのは出版業者である、十冊の本が売れるのにそれを貸本にして回覧されたらそれだけ売上げが減少すると考えたのだ。

そこで出版業者は貸本を借るような手軽な値段で買える雑誌をと考えたのが週刊誌である。週刊誌はこれが初めてではなく、サンデー毎日や週刊朝日などは昔からあったが、いわば新聞の分身で読者層が限られていた、それが雑誌出版業者の出現によって一段と活気を呈して来た。

売れるとなるとすぐまねをしたがるのは日本人で、われもわれもと乗りだして来た。新聞、雑誌の出版業はもとより、月刊誌を週刊誌に乗りかえるやら、三文文士のグループまで週刊誌を出すと云う騒ぎ、現在では総評までが週刊誌を出している。

週刊誌に力を入れるのにはもう一つの狙いがある。一般雑誌だとお客に売ったものがまた古本屋へ回る、層屋に売ったものでも業者が買い集めまた古本屋へ行く。つまり形のあるかぎり何度も売られる事になり、貸本とあまり変らない、週刊誌の方は一度層屋に売られると古本へ帰らない、袋にされるか製紙工場へ逆戻りする位のものだ。但し読んであまり為にならないものだけが古本でも売られている。それにしても全週刊誌から見れば知れたもので何人も人の手に渡らないから消耗品に近いものになる、雑誌のもつ宿命打開に成功したと言えるだろう。

週刊誌の起こりと発展について概略をのべたがこれは私見である、固い話はこれ位にして、川柳家の見た週刊誌を鑑賞しながら稿を進めて見よう。

週刊誌クイズの趣味もあって買い　藤四郎

クイズ解くだけに週刊誌を漁り　美音子

週刊誌クイズへのぞく目を感じ　越舟

週刊誌クイズへ家族の眼が揃い　草右

週刊誌クイズの頁だけ汚れ　白面子

週刊誌クイズに追っかけられて生き　春巣

週刊誌の売上げが雑誌の二〇パーセントをメると言われている現在だが、週刊誌ブームの役割を大きく果したのはクイズの力と言っても過言ではない。人の集る所クイズの話でもちきっていた事もあるし、何人かのグループを組んで賞金獲得に夢中になっていた人達がたくさんあった、岐阜の駅前の本屋でクイズ応募券を切り取った週刊誌が十円で積んであった話も聞いた。

週刊誌クイズマニアが五冊買い　文秋

クイズ狂運根勘を教えにし　同

これ程さかんであったクイズも、めったに当らないとわかって来ると、だんだん下火になって、今ではクイズの事を言う人があまりない。クイズ如きをと笑うなかれ、賞は取れなくても、当用漢字や現代かな使いを覚える事妙である。

サンデーと週刊朝日で軽い旅　多久志

お隣りの週刊誌借りる汽車の連れ　つよし

週刊誌夜汽車の旅の友にする　笛生

ちょっとした旅で必要品のように週刊誌を持って行く人が多い。乗物では他人の眼があるので、エロ物の週刊誌は気が引ける、それでも平気で読んでいる人もあるがまず週刊朝日やサンデー毎日を読んでいれば無難で知識人らしく見えるものだ。また週刊誌は安い値段で買えるから、あとは捨ててもよいと言う気持で随分ぞんざいに扱われる、丸めたり折ったり尻に敷かれたり、さまざまな風物が眼に浮ぶ。

街録へ丸めて上げた週刊誌　川太郎

週刊誌丸めて紳士話題変え　宗太郎

週刊誌くるくる巻いてバスを降り　九呂平

週刊誌あわれお尻に敷かれたり　虹要

このような週刊誌でも案外捨てて行く人は少いらしく、

週刊誌土産に出張から帰り　美文

週刊誌一冊残る出張さ　山川児

週刊誌もお土産のうち旅かばん　絵見

こうして持ち帰る人が多く、週刊誌忘れたふりで置いて降り　方川

どうも家へ持って帰るには内容がいかがわしいと言うものでないと捨てて行かないらしく汽車バス電車と持ち歩いている人が多いと云う事だ。

闘病になれて待つのは週刊誌　方正

軽い読物と云う事が病人にも喜ばれる、豆秋さんの入院中も枕元に週刊誌がいろいろ置いてあった。私も持って行った事があった軽いのはよいが、かる過ぎて深みがないと云うのも欠点の一つだが、

週刊誌浅く広くと知識売り　守信

週刊の知識で妻に叱られる　健朗

週刊誌の知識で時局を批判する　狂風

物識りを手軽につくる週刊誌　詩酔痴

この頃の店員は週刊誌ぐらいの知識で雇主に理屈を言うので使いにくくて困りますと愚痴を言っていた人があった。浅い知識でも無いよりはましかも知れないが、

週刊誌拾い読みして待ち合せ　芙路

週刊誌丸めて遅い人を待ち　寿栄

週刊誌山ほど積んで歯科医待たせ　宗太郎

待たすとも待つ身になるなと昔から言われているが、待つ身のいらいらをいやすのにも週刊誌は粋な役割を果たす事もある。読み終ってもまだ待つ人が来ず、週刊誌を丸めて握っていらいらしている

姿など第三者が見ればユーモラスなものだ。

一家揃って週刊誌党もある。テレビの合間にちょっちょっと見るのには手頃なんだろう。

週刊誌また子供からリレーされ　万女

一家誰れもが楽しめる週刊誌ならよいが、いかがわしいものも仲々多い。

新聞で言えない事を週刊誌　嘉次

週刊誌女性心理を書きたてる　桃村

いわゆる○○実話とか○○記事とか称する暴露ものである。これも嘘ばかり書いて実話の本を出し　文秋

と割切っておればよいのだが、

週刊誌をほんとにしてる女の子　菁風

のようにそのまま受取る人がかなり多い。都会より農村に行く程多くなる、それだけ農村の人は純心なのだ、だから売出しの俳優などが、噂をもとにしてスキャンダルでも書きたてられようものなら致命傷になる事さえある。ペンの殺し屋とか、ごろつき記者と云われる人種が東京都をはじめ都会地にはひしめいているのだ、あなおそろしやおそろしや。

週刊誌の本質かも知れないが退屈しのぎに読むように出来ていてミーハー族好みのものや、中年向きの物がよく売れる。年配のものが読めば、エロも程よき清涼剤になるが、不良学生などが読むから困りものだ。

週刊誌ばっかり読んで不合格　甲吉

これも自業自得だろうが。

時事問題を取り上げたり、まじめな事を書いた物はあまり売れずつまらないものが横行する、売っている者でも嘆かわしいと思うくらいだが、これすなわち悪貨が良貨を駆逐すると云うグレシャムの法則のようなものなのだ。

週刊誌にもグレシャムを知る嘆き　天悟空

われわれの力ではどうにも出来そうでない。

週刊誌と煙草を売って二号美し　麦太楼

週刊誌を売っているのは本屋だけでなく、煙草屋から薬局パチンコ屋まで置いて居るところがある。商売をしながら内職をすると云う事は、いかにも店がはやらないのを証明しているようでミミッチイ事だ。週刊誌ならただ立てかけて置くだけで本業にもさしつかえず綺麗ななりで結構副業になる、五千円から一万円位の収入を上げているのはざらにあるそうだ。

売らんかな主義の週刊誌だからニュースには敏感である、スキャンダルはもとより、お目出度い記事もニュースになるものは逃がさない、一番狙われるのはスターである。

グラビヤを埋めるタフなり週刊誌　白柳

タフガイと云われている石原裕次郎だけではなく、人気の頂上にあるスターは、しばしばグラビヤを埋めつくす事がある。裕ちゃんとマコ（北原三枝）最近ではネコ（有馬稲子）とキンギョ（錦之助）の結婚式の時など週刊平凡や週刊明星は増刊にもかかわらず、僅かの間に売切れてあとで知った人に断るのに困ったくらいだった。しかし回顧してみて一番よく売れたのは、なんと言っても正田美智子さんと皇太子の結婚のニュースである。あの時は全週刊誌が競って書きたてた為に、片よらずどれもこれも売れた。今だに美智子さんのグラビヤをかならず載せていると云う週刊誌がある。正に超スター級である。あの時にモデル料や版権をごっそり貰ったかどうかは私は知らないが。

愚の詩

今西生薑

最近私は愚の哲学のエッセイを読んだ。その著者は現在世の中には賢こ過ぎる人間が多すぎる、例えば大学なども寄附しても子女を大学に入れたい父兄が多いのだから、一定額以上寄附したら入学を認める大学を作ってはどうかと述べていられる。

一寸考えるともっともだが、親の愚は解決するとしても子女の愚はどうなるのだと反問したくなる。勿論この著者も子女を賢にしようと考えているのでは無く愚に還元して欲しいと望んでいることは他のエッセイからも推断出来る。しかしこのようなエッセイを読んでいると、お脳の弱い私など頭がコンガラがって解らなくなる。結局は円光大師の一枚起請文にある「よく学をなすとも一文不知の身になして……」と云うのと同一の思考から来たものと考えた。

このようなエッセイを読んでいると、何だか肝心の愚が解らなくなるので、もっと解りやすい物はないかと考えて見たら極く手元にあった。即ちそれは川柳である。たった十七字の「愚の詩」とさとった。

丁度その時川雅の私の小文に対し、x先輩から批判的な葉書を戴いた。内容は省略するが、私はその返事に川柳を「愚の詩」とする考えを申上げたが、私の文面の前後がゴタゴタしていた為「下手の上手」を表明しているものと取られたらしい。然し生々庵先生の山下清観にも、式場隆三郎と云う良き女房役？を得て愚鈍な山下の画材を延すことを得たと見ていられる。川柳は理智が働き過ぎると理屈になる。反面川柳は非常に多方面のテーマを取り上げることが出来るので非常に理智が必要となるが、表現上ではこの理智が完全に隠されていなければならない。ここが私の川柳を「愚の詩」と言っている処である。

即ち川柳は愚から賢、賢から愚への還元を要求している十七字短詩と思えるのである。

勿論川柳の凡てを愚の詩とは考えていないが、川柳を一応愚の詩と定義出来そうな気がする。但し暗愚では困るので亜鈍氏が詩川柳を提唱していられるのもこの点ではなかろうか。

僭越だが愚の詩の観点から路郎先生の名句を引用して見たい。

酒とろり　とろり　大空の心かも

この句は一見すれば賢の句と云うべきだろう。然し酒の酔にかかる人間の弱さも半面に出ている点から見れば明からに「愚の詩」と考えられる。処で

おれに似よ　俺に似るなと子を思い

に至っては明白に「愚の詩」である。

亡き豆秋氏の「ふるさと」を開いて見ても愚の川柳が如何に多いことか。大胆に川柳を愚の詩だと定義をしたものの、さて愚に還ることの難しさに戸迷っている次第である。

入門講座

研究題「屋根」

清水白柳

今月の集句は大体に於て平淡だったようです、それは題が屋根というだれでもが毎日見なれて居るものであって、その下にいつも居るものでありながら、さて句にまとめるとなると、つかまえどころのないものですから、見ただけの句になり易かったのだろうと思います。

小雀がかくれんぼしてる屋根瓦　K

かくれんぼという処は面白いのですがそれだけの報告に終ってしまい平凡すぎました。

屋根雪溶けて雀の死骸見る　照児

こんなことがあり得るのかどうかとも思いましたが作者が実際に見られたものとして頂きますが、もし想像で作句せられたとしますと私のミスになります、それは私がこうした事を知らないからです。

もう五寸国旗が屋根へ足らぬ羽根　Y

屋根へのった羽子へ竿がとどかないという句は古くから詠まれているので着想としても表現としても損をしています、古句の中に、「姉の知恵庇の羽子に鞠つぶて」というのがあります、姉の知恵という川柳独得の省略法を参考にしたいと思います。

台風が去って大屋根初登り　K

台風の屋根そのままに年を越し　雄声

屋根瓦飛ぼうが我は借家の身　同

大屋根へ初登りというのが真実であろうと思いましたが初登りという語句に稚拙さを感じました消化しきれなかったのだろうと思います。次の句の年を越したという真実味が句を生かして居ますが最後の句の借家住いの心理描写の句の方が佳いと思いました、台風の中で落ついて居るわけではありませんがその風刺が面白いと思います。

アンテナの四肢踏ん張って屋根に乗り　H

棟割りの屋根にアンテナ立つ世相　S

古屋根のアンテナだけが光っとり　R

どの句もアンテナが立っている状態を説明した句に終っています、四肢踏ん張ってとよいところをつかんで居ますが、ありふれた状景だけに平凡です、棟割りの句は立つ世相などと、ひと事のように説明してしまったのが失敗したようです、古屋根の句は、屋根の古さとアンテナの光っているアンバランスに作者は興味を覚えられたのでしょうがそれだけでは句にするだけの内容を持って居らないと言えますからもっと着眼点を広くすることに心掛けて頂きたいと思います。

1 屋根瓦恐々踏んでるとうしろお　T

2 屋根修理日曜大工瓦割り　H

3 屋根直しもう年寄りの手におえず　句念坊

4 屋根直したい屋根直したいと言うて死に　初甫

5 屋根直し隣りの世帯見てしまい　周甫

6 長梯子屋根師の土にややたわみ　生薑

7 下りて食えなどと屋根屋へ失礼な　村諷子

1の句は素人のことをとうしろおなどと、言った言いまわしをしてことさらに句を悪るくした感じがします、これはくすぐりという可笑味をねらったものですがこうしたことは避けてほしいと思います。2の句は素人を日曜大工という表現で現わしていますが、瓦を割ったというだけの内容では十七文字も使って句にする程の事柄ではないと言えます。3の句のもう年寄りのという詠歎は作者の実感として頂けます。4の句の同じ言葉をくり返した手法が生きています、そしてその人の年令までが想像させられます。5の句は着想のよさが生きています、素直な句柄も好感が持てます。6の句屋根師の土にとは川柳家のするどい観点がうかがえます、厳密に言えば土を上げるのは屋根師ではないのですが、大まかに言って屋根師にふくめてもいいでしょう。下りて食えの句は古句調ですが面白いと思います、併し古色蒼然とした表現方法は考え直したいところです。

古句の中に〃今日限りの屋根屋柳を解いて行き〃というのがあります。屋根葺が終ったので邪魔になっていた柳を縄でくくって置いたのを解いて帰ったという趣きの深い句があります。

1 迷信の膏血しぼり銅の屋根　K

2 神殿の屋根に糞つむ鳩の群れ　S

3 展望台寺の屋根から指をさし　K

4 本願寺グレンデのような屋根見上ぐ　句念坊

1の句の膏血しぼりという語は陰惨すぎるようです、もっと軽く風刺した方が句がもっと生きてくると思います、銅の屋根によって新興宗教の教会所を表わされたのはよいと思いましたが残念な句であります。2の鳩の糞つむと余りにもあらわにそのままを詠まれたのが句品を傷けています、鳩の群れがあれば必ずその白い糞が連想されるのですから糞つむとまで説明しなくてもいいわけですから、その四文字をもっと考えることが必要です。3の展望台の句は寺の屋根を目標に順々に説明しているのが判りますが、一読した時お寺の屋根から展望台をさしているよ

うに考えられる点があるのが表現の上での難点といえるようです、句を一度分解して考え直す必要があるといえます。4の句のグレンデのようなという比喩は成功していますがそれを見上げた驚きを感じさせる句語がほしかったと思います。

雨ふりはラジオも聞けぬトタン屋根　宇佐美　藁葺へトタンを張って家伝薬　和三郎

バラック建てに住んでいた終戦後間もない頃を思い出させてくれた句ですが、現在でもこの句は生きているでしょうか、述懐の句としては深味に乏しいうらみがあります。家伝薬の句はその家柄の古さとトタンを張った現在との対照を面白いとは思いますがまだ少し平淡さを免がれないようです、それは外側から見ただけの句であってその矛盾をついて居ないからかも知れません。作者の句にまとめられた意図はよく判るのですが。

いけ好かぬ赤屋根はぶいて道おしえ　孝司

屋根かたち珍らしいのも旅の空　村譽子

道を教えるのに便利のよい赤屋根なのだが住んでいる人が気にくわぬのか、屋根の色が気に入らぬのか、ハッキリしないが、それを目標にせずに他のものを目印に教えたというのが面白い着想でした、いけ好かぬという上五文字に少し難点があるようですが仕方ないと思います。旅の空の句は少しばく然として焦点がぼやけて居るようです、それは珍しいのもという語です、これが例えば北陸地方の石の乗った屋根とか何とか具体的なものがあらわされているともっと佳い句になっていたのではないかと思われました。

埋立地昨日の海に屋根が延び　陸伯

昨日の海とは面白い現わし方です、時間的な経過をズバリと句にして成功しているようです。

屋根看板老舗をほこる色になり　初甫

家伝薬の句は屋根の古さを言っていましたがこの句は看板の古さを言っています併し句は平淡です。

ドン底の屋根突き抜けて呱々の声　文子

ドン底の屋根というのは貧困な家庭の誇張であることはよく判りますが適格な比喩であるとは言えないようです、併し子宝を得た喜びを感じさせることには一応成功しています。

隠密がお城の屋根をかけめぐり　周甫

時代劇映画の一コマを句にした面白さはありますが着想の広さだけで遊びに終った句と言っては失礼に当るでしょうか。

鶏小屋の屋根へくたびれた布団乾す　ひろし

これはまた余りにも生々しい句ですが鶏小屋という高さの低い屋根へ布団を乾すことはあるでしょうが、清潔とは言えない鶏小屋の屋根を考えるとこれも想像の句ではないかと思うのですがどうでしょうか。

貸しもせず売りもせず屋根に草生える　清風

勿体ない空家があるのに屋根に草の生えるまま放ってあるさまを詠んで居られます、貸しも売りもしない持主に対する作者のふん満の心理がもっと強く出されると佳い句になったであろうと惜しまれる句であります。

屋根迄の智恵で吾子にせがまれる　辰始

積み木か何かで遊んでいる子がもっと積んでほしいと言ったのか、絵でも画いているのかと思われるのですが、表現に少し難解な点があるようです、それは屋根迄の智恵でということによって現わされることが理解されにくいのではないかと思うのですがみなさんと共にゆっくり考えて見たいと思います。

屋根ちょっと違えて長屋の差配住み　弘村

差配という語は現在では落語の外には使わないのではないでしょうか、屋根一寸違えるという観点は面白いのです、三軒長屋の真中は悪いと言って端の家の屋根に段をつけて高くするといった風習があるのですが、差配が住むために屋根を高くしたとは一寸作りすぎたようです、尚差配というのは現在では管理人というのでしょう。

屋根裏はあとまわしの大掃除　京四朗

着想がだれにでも考えられることなので句が平凡になっています、ありふれた事柄であっても表現に苦心をするように心掛けてはしいと思います。

新築へ隣の屋根の雨がはね　静水

こまかい処まで気がつかれて居ますが、その雨のために壁が汚れるという腹立たしさを句の上に現わせたらもっとよかったのにと思われました。

屋根低き屋台うどんに背をまるめ　光道

申し分のない面白さを持っている句であります、屋台店の屋根を思いつかれた着眼点に敬服致します、句もソツのないまとめ方をして居られます。

屋根迄は手が届かぬとタライ受け　杏花

自慢した形で雨漏りもて余し　孝司

漏れる位置屋根へ聞かせる音たてる　八九寸

三句共雨漏りの句でありますが、タライで受けるの句は、屋根迄手が届かぬという句語に狂句染みた感じがするのであります、それで手がまわらぬとする方がよいのではないかと考えられるのであります。自慢した形の句は屋根の形が急勾配の隅のためにか凸凹の多いためにか専門家もその原因がわからない時が往々あるものです、それを詠んで居られるのが面白いと思いました。最後の句は立派に完成された佳句であります、この辺が漏るのだと下から物差しか棒かで屋根裏のあたりをコツコツとつついている状景がすっきりと描き出されて居ります、屋根の上に居る人の姿まで浮き出しているのは句の仕立方にソツがないからであります。

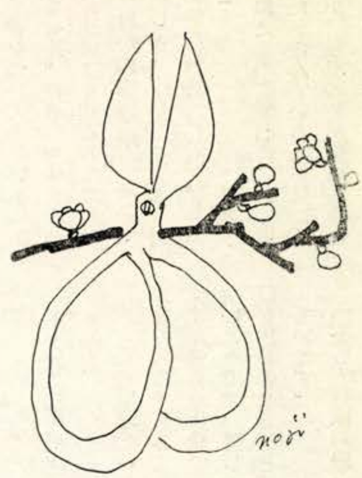
今月は少しきびしかったように思いましたがあしからずおゆるしを願いたいと存じます。

次回研究題「袋」

〆切　三月二十日

発表　五月号の予定

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四　清水白柳宛



一路集

午後

小川恒明選

午後に来てくれと集金ことわられ　雄水
午後十時　まだ帰らない膳覆い　ひろし
午後の休息看護婦も編んで居る　蛙水
午後のヒマ看護婦少し読んでくれ　雄峯
午後からの務めルージュの濃い女　無極
午後からの雨デートたじろがず　一鶴
午後の陽を探して子守の歩が進み　博
先負とあって縁起をかつぐ午後　卯之助
午後からはお出掛け朝寝して居ます　宗義
お化粧は念入り退社後はデート　勝子
青空へ午後は雨だと言うラジオ　涼髪
午後六時定期便のよう帰って来　庸佑
税務署の午後哀願の顔が寄り　光道
すまし顔午後の特価をねらう主婦　花風
売れ悪く露店午後から場を変える　竜昭
エスケープしたいと思う午後三時　恵二朗
夕刊へポケツの端銭確かめる　生薹
午後行くの電話プランはおじやんなり　好女
午後からは力入れます寒い朝　季賛
昼過ぎてやっと目覚める繁華街　圭水
午後からは温いと患者試歩に出る　素風
雨天順延午後かららりっと晴れ上る　静水
午後からは休診待合室は混み　大八洲
午後休診女医も女として出掛け　井蛙
株売れば後場のなからじ新高値　雄々
午後に起き午前に眠る街に住み　野迷路
昼迄と云う留守番へたそがれる　晃康
順番は午後へまわった診察所　祥月
花街の昼ネグリジエのままで会い　鵜汀
犯人追って午前も午後もない刑事　圭井堂
白壁に午後の陽ゆらぐ冬木立　千翁
冬休み日記午後はみな遊び　市郎
午後からのカーブ気になる体温表　弘道
縁側におばあさん猫と午後を居る　耕一
出直した午後を役所がまた待たせ　宗太郎
アフタヌーンランデブーの日短か　句念坊
陽が西に落ちてあわてた長話　愛鳩
午後からの暇を見つけたゴルフ場　雪峰
ラブシック午後の二便を待ち焦れ　代仕男
サーカスのテントが寒い昼下り　孝風
スチームの午後が眠むたい梅日和　和三郎
午後二時のほうらくみんな風邪を引き　句念坊
午後からは往診ですと居留守なり　忠三
午後からは風を気にする釣の位置　代仕男
午後の陽をベッドに浴びて句を作る　隆文
快復期午後の予定は釣にする　一鶴
午後の椅子課長も一息入れている　清風
出雲の神だったあの日の午後の雨　美郎
オルゴール午後はゆとりのあるひびき　淀月
許るされて午後三〇分の試歩の足　藤波
午後六時今日が始まる爪の色　和三郎
だめ午後のスケジュールはつまってる　八郎
午後ちょっと日が射す路地へ梅を植え　十九平

佳

銀行の鉄扉冷めたく午後を閉じ　みのる
午後の授業さぼってまでも旗を振り　たけお
週末の午後は箱根でいる身分　繁太郎
午後になれば晴れます空へ干して出る　初甫
午後からの土俵がふめるまで出世　無極

人

生きてゆく屋台を夜の位置におき　孝風

地

午後にならばあいていますとメモを繰る　晃男

天

停年近し疲れる午後のメガネ拭く　白墨

男

弘津柳慶選

男性を俎上に赤い気炎吐き　無極
男世帯洗わぬ皿のたまること　圭水
女社長の頤で男が使われる　雄声
知っていて黙って見せる男親　暁明
ライバルへ男の見栄が使い込み　井蛙
男の子生んで養子にゆとりが出　弘道
野球拳大の男を裸にし　清風
小娘に五十男が嬲られる　句念坊
紅一点男の視線をみな集め　十九平
婦人部の引越し男の手が借られ　十九平

色紙短冊
書画用品
大阪戎ばし筋
丹青堂
電南 七二、七三

男みな獣に見えて嫁き残り　隆文
男の子欲しさに三女四女生れ　鵜汀
惚れた弱味女男に金をつぐ　庸佑
あの顔で女たらしと云う噂さ　初甫
義理がたい男長屋に住みなれる　淀月
未亡人男に貢ぐ金を持ち　雄々
こりごりや云うたおとこにまたかかりみのる
男の子産めずに養子の代を継ぎ　博
人生劇場男の意地が燃えつづけ　一鶴
五年前男になると発った切り　静水
気の弱い男二次会ついてゆきたけお
鰥下男が消える牡丹刷毛　和三郎
未亡人男へ住所ばかしとき　大八洲
PTA男が隅でかしこまり　宗太郎
男の子と決めて産衣に余念なし　美由起
産湯から男でござるの声で泣き　ひろし
女三人へ男顔負けしてしまい　季賛
男三人とどのつまりはのむ話　恵二朗
ぶ男と安心していたのが不覚　恵二朗
気の弱い男が新聞販やかし　旭峯
男とは見えぬ女形の腰の線　蛙水
入墨の渡り歩いている飯場　卯之助
男ってそんなものよと割りきられ　石峰
妹は男臭いと窓を開け　美郎
男娼がアレアレ昼の風呂へ行く　圭井堂
末っ子が男で内中持てあまし　杏花
愚痴っぽい男の膝が酒に濡れ　白墨
よろしおすこれで男におなりやす　八郎
独身の男靴下嗅いで履き　勝子
佳

ゴキブリの様な男が汚職をし　清風
男臭い宿の布団に寝つかれず　雄々
孕ませておいて男の邪慳なり　一鶴
酒飲まぬ男にあった土根性　静水
つまらない所へ男の意地を立て　大八洲
男だて男勝りの妻を持ち　素風
ヒモと云う男立派な軀して　雄峯
裏切られた男それから金を蓄め　井蛙
手きびしい男帰れば恐妻家　代仕男
鉄骨へ挑む男の黒い眉　好女
人
飲むまでの仕度は男小まめなり　愛鳩
地
融通の利かぬ男で任かす鍵　井蛙
天
鉄橋雲へ流れる太い声　和三郎
軸
抑留の苦痛男はじっと耐え

割箸

橘高薫風子選

割箸を割りまた今日が始まった　耕一
割箸を割るザーマスのキザな事　周甫
割箸をお先に割って鍋の味　晃男
割箸も並べて控室を呼び同　同
割箸は客の個性をよく見ぬき　祥月
挨拶もそこそこにして箸を割り　恵甫
割箸にまだ手を付けずかしこまり　鵜汀
割箸の袋で女将の好み知る　八郎
割箸を粗末にしない子に育ち　雄声
さて要るようになって割箸のありどころ　天悟空
割箸を静かに使う見合の座　雄々
割箸の一本毎にある利益　藤波
割箸をさいたのが子の気に入らず　一鶴
割箸のタクトに校歌クラス会　隆文
割箸をわる手に見せる不機嫌さ　球絵
割箸を噛んでるちょっと嫌な客　ひろし
割箸の方があきれる程に食い　圭水
割箸が派手な汚職の膳と知り　代仕男
巻封筒へ割箸があり手で食べる　季賛
箸立ての割箸丸くなって立ち　蛙水
偏食が割箸ばかりもて遊び　好女
割箸が膳のわさびをまず溶かし　生薑
割箸をいつの日に割る蔭の膳　旭峯
里帰り割箸がつき他人めき　同
西部劇見た興奮で箸を割り　雄峯
割箸はもうあきました嫁が欲し　恵二朗
割箸で真赤になった火を挟み　卯之助
猪口重ね上戸は箸をまだ割らず　十九平
ピクニックママ割箸の予備も入れ　同
お箸割る音もはずんだ妓の笑顔　客遊子
箸を割る手つきが男知っている　同
上役を罵る勢箸を割り　美郎
割箸の忙しく動きドヤ街の朝　久雄
割箸の火箸代りは哀れなり　無極
下積みのペンだこわびし箸を割る　光道
割箸がうどんのゆげの中にあり　庸佑
つつましく割箸ためて世帯じみ　初甫
割箸へこわばりがちな見合の手　暁明
割箸が火箸の役も集会所　同
割箸を割ったサービス気に入らず　保夫
佳
洋食へ割箸平然として一人　八九寸
割箸も入れて羽田の人となり　圭井堂
箸割って呉れてる手付母に似て　客遊子
割箸を社長が割って続く音　宗太郎
割箸が折れてマダムにあやまられ　涼髪
人
割箸の一本山で礼をうけ　藤波
地
背信の妻を想いつつ箸を割り　無極
天
割箸を割ってくれない税吏の手　恵二朗
軸
割箸よ汚吏に割られること勿れ

柳界展望

ホノルル空港にて　（一月廿一日午後）

若本多久志氏（不知哨会副理事長）は川柳雑誌社ハワイ支部（クイロー社）の幹部台から前山北海（一人飛んで）巣山快夢起・古川魔花麗氏等に出迎えられた。多久志氏渡布土産の記事は次号に発表。

句会

▼本社三月句会は七日（水）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。早春の和やかな句会へ柳友御誘い合わせの上他数の御出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）句会は二月二十日（火）午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は二月十五日（木）午後六時半から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は二月十六日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪逓信病院川柳句会は二月二十四日（土）午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川雑岡山支部句会は二月十日（土）岡鉄クラブで開催。▼伍健忌川柳句会は二月十一日午後一時から愛媛新聞社ホールで開催、七十余名の参会者が故人を偲んで極めて盛会であった。▼平安川柳社（京都市）創立満五周年記念川柳大会の詳細は前号既報の通りであるが、開会十一時が十時に、出句締切りが午後一時が正午に変更された。▼きやり吟社（東京都）三月の句会は一日（木）五時半から千代田区神田東紺屋町、毫摂寺東京別院で開催。▼広島川柳三月句会は十一日（日）午後一時から下中町慈仙寺で開催。▼平安川柳社（京都市）三月例会は一日（木）六時から寺町通仏光寺上ル東側透玄寺で開催。▼観光川柳（東京都）三月句会は十一日（日）午後一時から港区芝新橋六ノ六伊藤揺天居で開催。▼第十三回愛媛県春の川柳大会は三月二十五日（日）午前十時から松山市北歩行町PTA会館で開催、兼題、空想・倍増・大巾・新卒、投句は切手五十円を封入の上、三月二十日までに松山市道後上市九五川柳まつやま吟社宛。▼川柳噴煙社（熊本市）三月例会は十日（土）午後六時から大江町交通局クラブで開催。▼三重川柳会（津市）毎日三重柳壇共催の春分川柳大会は三月二十一日正午から津市古河洞津荘で開催、兼題、常識・工事・旧友、投句は津市丸之内緑町三重川柳会事務所宛。▼はちのへ川柳社（八戸市）創立三十周年記念川柳大会は五月二十日（日）午前十時から八戸更上閣で開催、兼題、すて石・盃・友情・往復・自信・みやげ・得手に帆をあげ・花・光・よろこび、投句はハガキ大用紙に各題三句、記名の上、四月二十日までに八戸市番町四〇川柳堂内はちのへ川柳社宛。▼熊本博協賛噴煙川柳大会は四月一日（日）午前十時から熊本市桜町県庁裏熊本県町村自治会館三階ホールで開催、兼題、躍進・熊・本・博・覧・会・投句は切手五十円封入の上三月二十五日迄に熊本郵便局私書函四十五号噴煙吟社川柳大会係宛。

消息

▼若本多久志氏（西宮市）は一月二十一日、ライオンズクラブの布

胃病の正しい治療に！

山之内

山之内製薬株式会社
東京都中央区日本橋本町2ノ5
大阪・福岡・札幌・名古屋

ファイナリンソフト
ファイナ

散剤　6包入……100円　15包入……200円　30包入……350円　50包入……500円
・錠剤　新発売　45錠 200円・90錠 350円

哇産業視察団の一員として渡布、約一週間の予定でハワイ五島を視察観光された。▼牟田一哲氏（大阪市）は一月二十九日医学会役員会出席のため上京、二十四日はアメリカへ留学する愛婿を羽田に見送られた。又、千葉県小湊の日蓮上人誕生寺等を巡られた。▼築山快夢起氏（ホノルル市）は図書館の雑務、諸団体の役員会、新年会その他外出が多く多忙を極めておられるが、若本多久志氏の渡布の報に柳談を交わすのを心待ちにしていられると。▼塚越迷亭氏（東京都）が路郎主幹に寄せられた書信によると「明治座の夜の部を私夫婦と啞三味夫妻で見に行って帰ったら」とあるが、柳壇の先輩がここまで家庭的なおつきあいをされているのを知ることはうれしい。▼堀風仙洞氏（大阪市）は今回、老人クラブの大阪ことぶき会で川柳講座を担当され川柳の指導をされることとなった。▼工藤甲吉氏（青森市）は最近東奥日報政経部長として県内を東奔西走席のあたたまる暇のない活動をされていますが、「青森はきょうも吹雪です」との来信がありました。▼浜田久米雄氏（岡山市）は最近の定期異動で岡山車掌区首席助役に栄転された。▼山田季貧氏（広島県）は二月七日の本社句会に出席後、水客・客遊子・万的・白渓子の諸氏と共にコーヒーで歓談、急行高千穂号で帰広されたが、春巣先生にお会い出来なかったのが残念であったと。「ゴミ溜のような車で旅楽し」▼槇紫光氏（愛媛県）は十二月中旬から顔面神経麻痺のため新居浜の労災病院に入院加療されていたが、二月四日退院十三日から出勤されている。▼池田古心氏（岡山県）は一月二十一日の川柳かがみ百号記念大会の席上、教育委員会から文化功労者として表彰を受けられた。▼山内静水氏（竹原市）は正月岡山の三社詣、一月十三日からの出雲大社参詣の団体旅行等に添乗、忙しさのため作句はますます不調でいらいらしていますとのこと。▼浅野芳朗氏（小松市）は二月二十日社用で来阪、不朽洞に路郎主幹を訪問歓談された。▼川岡霊眼子氏（諫早市）は二十五年振りに路郎主幹に寄信された。氏は昭和の初期風情と号し武部香林氏と共に川雅神津支部を結成、路郎主幹の指導を受けておられた。最近は長崎民友に川柳随筆を掲載されている。▼丸川初甫さん（菩屋市）は一月十五日、日本最大の大鐘乳洞秋芳洞に遊ばれ、「秋芳洞へぞうりを持ったまま廻り」の句信を寄せられた。▼小沢史葉氏（西宮市）は二月一日付で近畿電気通信局建設課設備監督に栄転された。▼高橋蟠蛇氏（須崎市）は当地も一月一日より引続き降雪が度々あり南国土佐とは名ばかりの感で、山間は一米から一・五米位の積雪で処によりバス等交通止めのこともある、状態だとの便りを寄せられた。

慶弔

▼志水礼司氏（大阪市）は一月十二日二女出生多栄さんと命名された。お慶び申し上げる。▼石井黙平氏（豊中市）の令閨は旧臘十日に卒倒、その後小康を得て自宅療養をされていたが一月二十一日永眠、翌二十二日茶毘に付された。年七十九。謹悼。

転居

▼坂田東洋男氏（尼崎市）は尼崎市中食満一二六郵政住宅へ転居された。▼川岡霊眼子氏（諫早市）諫早市天満町一二九七の新家屋に移転。

電話開通

▼後藤梅志氏（大阪市）の店UB食品に電話開通した。大阪三六一局〇九四六番。

正誤

▼二月号十六頁二段十八行目、十九行目のウ一〇会とあるはウ一〇・会に、十七頁二段十三行目杜若の句先口とあるは先々、二十行目の句の「亭主たる粉名をとき」は「亭主たる者粉名をとき」の誤りに付それぞれ訂正。▼同号四十二頁二段二十六行目の句圭井堂とあるは圭水の誤りに付訂正。

不朽洞会から

☆**常任理事会**——二月二十三日（金）午後六時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催
一、本年度事業計画
二、その他
本年初の常任理事会だけにすこぶる和やかに右の諸条件を審議。終了後、多久志撮影によるハワイ観光のスライド及び八ミリ映画を観賞して散会した。

☆**退会**——室田千尋氏（神戸市）は家事の都合により一月限り退会された。（多）

不朽洞の人々

出雲市高松公民館長・島根新聞柳壇選者の尼忠三氏

歩いたり休んだりゴールが近いのに
（緑之助）

我が人生航路はハッピーエンドに到着してもよさそうだが、問屋がそうヤスヤスと卸してくれそうにない。私の父は一昨年九十二才で死んだが、私もそれまで生きるとまだ三十四年ある計算になる。貧乏神と同居では三十数年は随分重荷である。

（自宅の炬燵にて）

雑川

婦人友の会の集い

内藤きさ子

松は過ぎても橘筋はいつもお正月のようなはなやかさ。お茶屋の前のかおりを嗅ぎながら、東へ入る約一丁目にわれら友の会の集会所がある……ごめん下さい……「格子をあければ顔なじみ」……が待っていてくれる。

七夕様のようにたのしい一年一度の集いが始まるのである。

閑静な春の陽ざしに、席題「花」「スタート」と取組む。トントンと軽い音が階段を上ってメンバーはだんだんふえてゆく。うき世を忘れ、世帯を忘れて作句三昧のひととき。晴着の袖をゆらめかせてペンシルが走る。げに幸わせのひとときではある。

やがて開会、ことしの金泥集全投句者は阿茶、奈良子、周甫、きさ子の四人で昨年にくらべると二人も少いとのことで理事長からお叱言をいただいた。一栄、清子ご両人は一回だけの脱落でその口惜しさがさぞかしとおもわれた。

全投句者には努力賞として葭乃会長から自筆の短冊が授与せられた。当日欠席の中村晴さんから出席者のみなさんへ、おみやげとして津の清の栗おこしのご寄贈があった。

入選句披講につづいての懇親宴は、変らぬ若さ?を発揮する娯楽番組となり、大いに唄い、且つ踊りまわり、おひらきの頃にはあたりはもうすっかりネオンにつつまれてしまっていた。一同は名残のつきぬまま、しあわせをねがい来年の再会を約して袂をわかった。

余興に出演された人々は、

「唄」―〃宗右エ門町〃〃張子の虎〃(阿茶)〃山のロザリオ〃(清子・章子母娘)〃やりさび〃(美喜)〃とんこ節〃(〆女)〃九段の母〃(春栄)〃べんてん小僧〃(こわいろ)〃(白美)

「舞踊」―〃御所車〃(葭乃先生)〃まゆ玉〃(小石)〃みずのでばな〃(良子)〃白扇〃(一栄)〃紅葉の橋〃(きさ子)

金泥集

麻生葭乃選

「炭」

炭焼きも山を降ります選挙の日　周甫
山脈に窓あり炭焼く煙立つ　同
炭買うて田舎は冬を待つ仕度　同
炭焼きの小屋へ録音班が来る　阿茶
はかり炭買うて平和な二階借　同
日本ブーム炭が外貨を獲得し　同
用談に悶着があり炭をつぐ　操子
サンマ焼く炭は上からあおがれる　同
うやむやの会議へ炭も消えたまま　きさ子

兼題「ひま人」　麻生葭乃選

ひま人の顔に育ちのよさがさせ　良子
ひま人と見られぬように気を使い　美喜
ひま人がペチャクチャ男性飼育法　〆女
ひま人も口先だけはよう動き　由子
ひま人がテレビの前で日を送り　同
ひま人でなけりゃ出来ぬと云うて褒め　白美
故障した体でひま人らしくなり　同
ひま人を見つけて歩くひまな人　春栄
ひま人に下足の多い日々の愚痴　同
ひま人の御念をいれたコツボ編　きさ子
ひま人にされて今度も役がつき　同
ひま人と見たか仕事たのまれる　清子
今日も又ひまをつぶしにデパートへ　同
ひまな人になってからだが弱って来　一栄
ひま人が菊の手入れにいそがしく　同
ひま人をもりする麻雀まけて来る　阿茶
気に入られ又又ひま人から電話　同
病気する外は用事のないお人　小石
ひま人が居て町内をかきまわし　同
忙中閑ありとはひとの見てくれず　きさ子
すれ違うただけでひま人のエサになり　同
ひま人に坐り込まれた冬の午後　同
人
内職おまっせとひま人ねらわれる　美喜
地
ひま人の趣味に家中使われる　阿茶
天
ひま人が今日のニュースをまだ知らず　一栄
軸
ひま人も今日は何日かと忘れて居　葭乃

兼題「展示会」　山川阿茶選

(三才と鋼吟だけ発表)

はぜ炭は寄らば切るその音ではぜ　同
そろばんの結果炭とは縁を切り　俊江
こぼれ炭貴重品よと拾われる　同
炭点前枝炭だけはついだ真似　春栄
宿直へ引継ぐ炭をついでおき　同
電化して餅焼くだけの炭を買い　一栄
パチパチと前ぶれしてからいこる炭　同
薪炭になる運命楼山清子
燃料革命炭の値が下り　同
初釜の炭をつぐ手に希望湧く　章子
炭俵燃やす空地が見つからず　同
暖房に肩身のせまい炭俵　とも子
炭屋ですと云わずに知れる顔で行き　白美
炭ついで話の継ぎ目考える　奈良子
勉強の子にサービスの炭をつぎ　勝子
寒がりがやけどしそうな瀬戸火鉢　〆女
言いにくい話へ炭をかきまわし　好女
炭をつぐ手つきも母に似てる姉　徳子
黒赤白炭の一生終りたり　美喜

次回題「心配」　〆切三月末日

菊花展しばし浮世の風忘れ　俊江
大臣賞へ小さい嫉妬の展示会　きさ子
展示会番頭腕のみせどころ　小石
展示会毒と知りつつ見てまわり
ふとところがあかん云うてる展示会

兼題「サンプル」　高橋操子選

サンプルが邪魔をしている小抽出　由子
サンプルで丁度の柄が派手になり　一栄
サンプルで迷い現でまた迷い　美喜
サンプルを添えて商魂ありがとう

兼題「本堂」　中島小石選

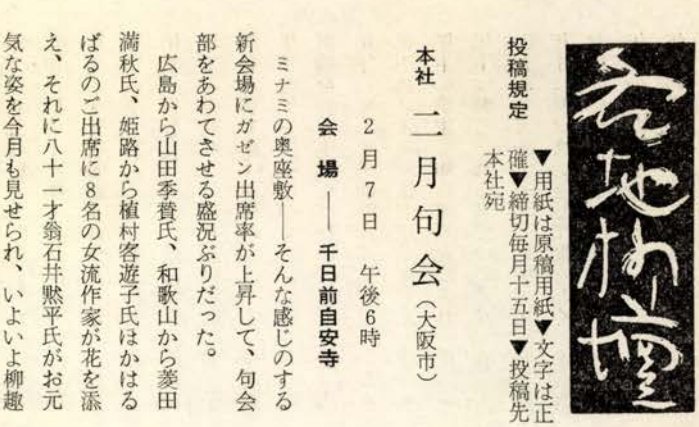
二代目は本堂貸してささえられ　良子
本堂の木魚たたいて見とうなり　一栄
本堂は小さく梅の名所なり　きさ子
観光の客本堂も素通りし

席題「スタート」　西出一栄選

スタートのおくれた店が粗品出し　白美
蟻のスタート下駄を抜け石を越え　きさ子
スタートの初夜から子供の数をきめ　白美
大器晩成スタート一向あわてない

席題「花」　内藤きさ子選

鉄骨の影でなよなよ咲いた花　操子
古稀近くなっても真紅のバラが好き　阿茶
明日開く花は夜露にいたわられ　春栄
貧しけれど花を絶やさぬくらしにて



いのちある句を創れ

投稿規定　▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社　二月句会（大阪市）

2月7日　午後6時

会場――千日前自安寺

ミナミの奥座敷――そんな感じのする新会場にガゼン出席率が上昇して、句会部をあわてさせる盛況ぶりだった。

広島から山田季賛氏、和歌山から菱田満秋氏、姫路から植村客遊子氏はかはるばるのご出席に8名の女流作家が花を添え、それに八十一才翁石井黙平氏がお元気な姿を今月も見せられ、いよいよ柳趣高まり句筵に熱気をよんで、はつらつ二月の会は中島生々庵副主幹の柳話から幕が開く。

ハワイから帰日した若本多久志副理事長が帰国のあいさつをされた。

川村好郎氏が19句という厳選だった。こうして鍛えられていく柳道また楽しである。二月の不朽洞賞カップは名手真鍋一瓢氏がにぎられた。（F）

出席者―路郎・静馬・清風・一三夫・白柳・緑雨・八郎・圭井堂・酔升・舟遊・行人・薫風子・野迷路・水客・すゝむ・生々庵・専翁・十悟・文秋・いさむ・紫香・尚史・瑞歩・庸佑・狂二・黙平・和男・万的・客遊子・白溪子・奈良子・正一・柳志・古方・一栄・清子・章子・凡九郎・一瓢・〆女・好郎・梅里・蕗児・東天紅・雄声・繁雄・満秋・進之助・柳宏子・いわを・栄・たねお・多久志・愛論・南宗・生薑・清人・あきら・阿茶・季賛・恒明・宏子・葭乃

兼題「雲行き」　麻生路郎選

雲行きを見てからプラン立て直し　季賛
雲行きを見つめて女空々し　文子
雲行きで親しい友も敵となり　句念坊
無為無策雲行き日々に悪化する　生薑
雲行きを察してそっと座をはずし　どんたく
雲行きを無視して雪にとざされる　一鶴
現なまのひかりで雲行きが変り　牧人
雲迅し寒月ふざけてるみたい　八九寸
末っ子が父の雲行き乱して寝　与呂志
雲行きがあやしいママのひたい際　阿茶
雲行きを見てから妻はバーマあて　八郎
雲行きが悪くミンクは引っこめる　多久志
雲行きへ露店投げ売る声になり　十悟
雲行きが気になるボスも顔を見せ　柳志
総会屋ゆっくり椅子を押して立ち　水客
団交の雲行き家計簿へ響きそう　八郎
睫え目に雲行きだけを見て戻り　南宗
雲行きは先ず先ずと見るヶ長官　一瓢
雲行きをかんがえぬいて家を出る　緑雨
新聞で知る雲行きは遅かりき　いさむ
雲行きはいい気味窮鼠猫を咬み　舟遊
雲行きへここで話せば不利と知り　南宗
雲行きがかがり裏から手が回る　圭井堂
暗雲低迷今夜は妻に逆らわず　一三夫
雲行きへ選挙違反も敢えてする　清人
雲行きにこの手土産を持てあまし　専翁
雲行きに足止めされた山の宿　栄
雲行きへこうもりに似た態度に出　恒明
雲行きは俺の意見をつぶす肚　清人
裏切りもでた雲行きの悪いスト　あきら
雲行きの荒さに借せとはよう言わず　新石
雲行きを見てリーダーがキャンプ張る　夢虹
雲行きは不利参謀も姿消し　舟遊
雲行きを感じてお茶を出しそびれ　紫香
変だったなあと雲行きあとで知り　白溪子
雲行きを変える酒とは淋しけれ　凡九郎
雲行きはママ黙秘権行使する　繁雄
出漁した夫案ずる雲となり　多久志
荒れそうな雲行きそそくさと座をはずし　愛論
雲行きはどうであろうと酒と生き　一栄
雲行きを知って大臣願出さず　いさむ
雲行きを秘書刻々にウインクし　たねお
雲行きを気にし発言しそこない　文秋
雲行きはピアノ買うてはくれぬらし　路郎
ままま母か雲行きばかり見てくらし　路郎

兼題「良縁」　戸田古方選

素破ぬきの祝辞うれしいご良縁　一ン十
良縁をやもめの父に言い淀み　生薑
良縁の理由の一つに趣味が合い　白溪子
働き手ふえた農家のご良縁　あきら
良縁が決まり空虚な日が続き　章子
人目にはご良縁のまま萎びゆき　生々庵
白痴美の嫁を良縁と思い込み　生々庵
つつましく姉姉なりの縁に生き　圭井堂
あびこさんここへも良縁たのんどき　〆女
良縁が金婚式をあげました　清子
うぬぼれがすぎて良縁とりにがし　恒明
良縁と仲人だけがはしゃいで　好郎
また良縁でっかと世話やきひやかされ　舟遊
良縁のまとまるまではとぼけとく　薫風子
良縁の調いまして君去りぬ　奈良子
娘をもって良縁祈る神詣で　清子
他人は他人われ良縁と信じ切り　圭井堂
世話好きが何でも良縁にしてしまい　庸佑
良縁良縁と本人そっちのけ　章子
良縁をもうあせらない三十娘　繁雄
良縁へフトみた易者ケチをつけ　阿茶
良縁に嫁いで犬の散歩さす　水客
良縁を得て老いらくを生き直し　十悟
母も嫁くよう良縁子に語り　一瓢
良縁のこれから先はご両人　凡九郎
人様のいう良縁は金のこと　清人
良縁の鼻の高さも似合いにて　阿茶
良縁を不思議な縁と言うまじき　梅里
良縁を息子一人でさがして来　瑞歩
再婚で良縁と言う味を知り　生々庵
馴落をしてまで良縁うたがわず　あきら
良縁と喜ぶ母のふとさびし　好郎
良縁と言われたことが気にさわり　水客
僕達の手で良縁を創るのだ　恒明

常識の程度が合うて添いとげる　文秋
良縁と思い込ませるエピソード　古方

兼題「年下」　黒川紫香選

年下の若さ世論をねじ伏せる　文子
年下の生意気ぶりもたのもしい　牧人
年下の強味言いたい事を言う　一鶴
福豆の数年下はもの足らず　どんたく
年下のプランそのまま実施され　季賛
年下の課長が出来て気をつかい　客遊子
我が儘を通す年下金があり　狂二
年下の意見は軽くあしらわれいさむ
窓割ったボール年下詫びにやり　静馬
年下の夫で苦労がまだつづき　一三夫
年下の主人甘える手を覚え　黙平
年下の夫を持って共稼ぎ　蕗児
年下の意見ちょっぴり痛いとこ　宏子
課長の方も年下を気にしてる　夢虹
年下の夫へ派手につくって出万的
正論を吐く年下をけむたがり　静馬
年下の主人で名前呼んでおりいわを
年下はメートル法ですぐ答え　圭水
年下の遠慮と知らず馬鹿にされ　正一
年下はおごられる気でついてくる　清人
ねだられて一すうれしい姉女房　野迷路
年下に見せまいとして髭をおく　水客
お揃いの着物年下とは見えずいさむ
年下の夫の帰り待ちわびる　尚史
年下の男の方が嫌気さし　南宗
年下に求婚されたあわてよう　奈良子
ボーイフレンド皆年下で姉ごより　多久志
年下の夫を持って頼りなし　宏子
年下の亭主無口になりたがり　生々庵
ひとまわり下やったなと覚えられ　水客
年下の良人が子供はしがらず　白溪子
年下のひもはりんきもしてくれず　一瓢
年下へすっからかんになって惚れ　紫香

兼題「ノイローゼ」　吉田圭井堂選

通学の線路へママのノイローゼ　八九寸
一聞いて十を悟ってノイローゼ　清風
他人さまの世話をしすぎたノイローゼ　凡九郎
ノイローゼはこちらでつとせと運転手　すゝむ
ノイローゼ医者もほとほとともてあまし　一栄
よう食べてよう寝るくせにノイローゼ　一三夫
進学へ親子揃ってノイローゼ　清子
ノイローゼ他殺の線を覆えし　梅里
夜泣きする児をもて余しノイローゼ　奈良子
きょうも負けそうで土俵がこわく見え　静馬
ノイローゼ又友達にからかわれ　狂二
ノイローゼまたビタミンを変えて見る　文秋
恋とやら知り初め申しノイローゼ　恆明
ノイローゼまだ予備校に籍がありノイローゼやないと言い張るノイローゼ　あきら
白痴という噂だったがノイローゼ　清子
奥さんのヒスに旦那のノイローゼ　満秋
よくねてはねれたと嘆くノイローゼ　南宗
ノイローゼですなとしまう聴診器　酔升
知らぬ間に何時なおったかノイローゼ　柳志
定年だノイローゼにもなるよ君　阿茶
血圧をきかされてからノイローゼ　静馬
又違う薬飲んでるノイローゼ　客遊子
くったくのない顔でいてノイローゼ　与呂志
ものおじぬ子を持ちながらノイローゼ　柳宏子
ノイローゼですとその場をにごしとき　行人
社長の目皆集会がデモに見え　十悟
葬式金をなくしてしもた夢ばかり　進之助
あんな顔していてみんなノイローゼ　水客
姉女房かまい過ぎてのノイローゼ　古方
へそくりが出来りや出来たでノイローゼ　黙平
他人の額みんな借金とりに見え　一瓢
肌荒れにやれ飲む薬塗る薬　多久志
十日目に初日を出したノイローゼ　進之助
どの医者も信用出来ぬノイローゼ　梅里
妻も子も信用しないノイローゼ　文秋
腸炎に小首かしげるノイローゼ　圭水
文明といたちごっこのノイローゼ　十悟
通天閣倒れてきそうなノイローゼ　瑞歩
死の灰がどうのと奥に閉じこもり　圭水
圭井堂

席題「スリル」　川村好郎選

大穴のスリルサラブの砂煙　進之助
スリルだけでは飽きたらず山で死に　一瓢
スリルではもうすまされぬ暴走車　凡九郎
冬山のスリルへ母の神頼み　一三夫
子には子のスリルあったつまみ食い　柳志
浮気するスリル味う恐妻家　清子
ポインターのスリル彼女がだきついて　恆明
スリル追う若さがほしい年になり　一三夫
生きがいをスリルに賭けて事件記者　文秋
飛行塔小さいスリルせがまれる　狂二
大袈裟にスリル呼ばわりふぐを食べ　生々庵
パチンコのスリル如きに誘われて　庸佑
スリラーへ螢光灯がフッと消え　白柳
火遊びの好きな女にからまれる　梅里
スリル場面一気に書いて極道すう　庸佑
よろめきに他意なしスリルだけのもの　客遊子
鮮やかなスリルへ間合のよい拍手　白溪子
へそくりのスリルを知らぬ夫婦にて　水客
下馬評の定期異動にあるスリル　客遊子
としよりのせめてエスカレーター乗るスリル　好郎

37年度全出席者（二月現在）

路郎・黙平・和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風・白柳・いさむ・すゝむ・十悟・瑞歩・専翁・紫香・南宗・柳宏子・薫風子・庸佑・静馬・古方・たねお・八郎・生々庵・舟遊・梅里・一栄・清子・〆女・生蔓・野迷路・阿茶・東天紅・雄声・いわを・恒明・愛論・季賛・宏子・葭乃

天位受賞者

③文秋②三司・圭水①栄・恒明・生々庵・一瓢・客遊子・好郎・一三夫・圭水・一瓢

不朽洞賞杯受賞者

圭井堂

席題「急ぎ足」　正本水客選

これがペースなんぼなとぬきなはれ　古方
素通りをごまかす為の急ぎ足　文秋
音もなく看護婦さんの急ぎ足　万的
急ぎ足花緒のゆるいのに気付き　恆明
急ぎ足近道をしてゆき違い　いさむ
どうみても間に合わぬのに急ぎ足　庸佑
株屋では一日ねばる急ぎ足　生薑
大寒の風にさからう急ぎ足　柳志
駅までを母出迎える急ぎ足　客遊子
今聞いた噂へ暇な急ぎ足　生々庵
財布拾うて急ぎ足とはなりぬ　白柳
モシモシとポリが呼びそな急ぎ足　酔升
急ぎ足おたのしみでつかと声かかり　一栄
急ぎ足母をひきずるようにして　薫風子
灯が見えてそれから急ぎ足になり　柴香
蟇口を拾いそこねた急ぎ足　瑞歩
おやおやおや詩人急いでる　薫風子
遮断機を半分おろして急がされ　白溪子
くせかしらボーイフレンド急ぎ足　阿茶
急ぎ足追いこす方も急ぎ足　南宗
急ぎ足今夜の君は判ってる　専翁
急ぎ足になるとビッコがわかってき　〆女
急ぎ足のあとから改札口をでる　古方
急ぎ足で見てきましたと旅にふれ　白渓子
トイレへと見えぬ程度のいそぎ足　好郎
急ぎ足できてスリッパを揃えとく　水客

席題「スランプ」　金井文秋選

スランプをぬけ出たらしい顔で来る　柳志
スランプが牛の涎といてこまそ　生薑
球団をかわりスランプたちなおり　阿茶
のんで来なはれとスランプいたわられ　恆明
スランプをマスコミ痛いほど叩き　阿茶
社長のスランプ人間ドックへ入ってる　薫風子
スランプにお世辞の言葉肚が立ち　いさむ
スランプに作家気取りの口をきき　狂二
マスコミにスランプ一層うろたえる　恒明
才能もないのがスランプ振り回し　多久志
スランプを口実にした旅鞄　水客
スランプへライバル大きくのしかかる　柳宏子
ホームラン打ってスランプから脱し　尚史
ペンだこをさすりスランプくやしがり　庸佑
スランプの睡眠薬とやけ酒と　一瓢
人生のスランプ老いの身に馴れて　専翁
愛情にスランプが来た七年目　客遊子
努力するチャンススランプあってから　一栄
スランプの波を乗り切る若社長　清子
スランプを見守る母の眼がうるみ　蕗児
スランプを脱けるあがきへ負けつづけ　梅里
倅はスランプを思い出話しにし　一栄
お百度を踏んでスランプ励まされ　愛論
スランプがあってほんとの恋になり　生々庵
こうなればスランプじゃない齢のせい　八郎
スランプへ勝負の世界容赦せず　梅里
スランプや言うて商売やめられず　静馬
失恋をしてからスランプが続き　章子
スランプと言う事にして飲み歩き　正一
女には逃げられスランプだけのこり　一三夫
スランプの友へせっせと片便り　奈良子
スランプに強気の役も肩おとし　雄声
スランプの壁をにらんだままで老け　一三夫
スランプがまたグループの義理を欠き　文秋

雑川
玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

初恋の夢を世帯がぐらつかせ　呂人
ひやかされ紅く崩れる初姿　京四郎
よいパパになって初めて帰る道　小袖
初恋に使うお金はなんのその　宇佐夫
はじめからなかったものと貯めさされ　柳宏子
目標の額になかなか寄らぬ寄附　一栄
目標は娘にあった見舞客　水京
目標にされて先輩気が疲れ　文秋
門松のある門借りて写真撮りらっきょ
門限も大目にみられ三ヵ日　喜久堂
門の外尼僧静かに落葉掃き　都詩子
団体旗へ激戦語る追手門　六竜子
家裁の門出て赤の他人と云う二人　はじめ
ガタガタと風にゆれても門かいな　白柳
元日の写真へ隣りの門を借り　はるえ
門のある家であったと孤児は云う　由子
門に出て見送る母を背に感じ　清子
スタートをせよと神主幣を振る　風仙洞
マラソンのスタート誰も慌てない　清子
目標を秘めて男の顔きびし　珠笑
スタートは遅れても双児で取りもどし　正一

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

3月号発売中　150円（〒18円）

特集
清涼飲料水の現在と将来
清涼飲料水製造上の問題点
清涼飲料水の水処理について
清涼飲料水の衛生管理
清涼飲料水の製造機械

講座　食品工場の衛生 ⑩

座談会　何でもやってやろう
〃　今年の食品業界のゆくえ

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区源蔵町5
電〔361〕9373～4
食品と科学社
振替 大阪6702番

川雑 阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

ガイドにはすまぬ夜行で来た疲れ　清人
エキストラ御用々々の声が枯れ　勢三
彼女等の時代をうつす髪かたち　双楽
ひもつきと知らず彼女の口にのり　山椒坊
彼女から誘われるのを待つ自信　葉光
叱られてる所へ彼女から電話　良聖
書持つ彼女にデート気がつかれ　一三夫
わしとこも家内が実力握っとる　清風
実力の差は実弾にたよっ　ときもうかると見なや踊らぬ実力者　正一
実力と言うて呉れぬが物足らず　柳宏子
番外の寄附副賞につけ加え　文秋
クライミングよく番外が座をつなぎ　恒明
番外で宗家も踊る喜の祝　梅里
鼻の差でトップを抜いた綱さばき　静馬
くしゃくしゃの顔でトップを奪い合い　十悟
トップ賞一瞬虚無におそわれる　生薑
トップモードながら言葉はなっとらず　正一
八百長でないかとトップうたがわれ　竹荘
風の向くままに歩いた放浪記　光福
風向きの変らぬ内に貰っ　とき　山椒坊

川雑 淀川支部句会（大阪市）

木村水洞報

口先でないあいさつが胸にしみ　水洞
よろめいた妻が虎の子持って逃げ　生薑
初産の嫁へ虎の子出してやり　一鶴
とらの子は銀貨銅貨が音を立て　孝夫
不意打の客へカレーうすめられ　六竜子
座布団がどれも汚ない不意の客　花村

川雑 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志報

わが妻になすべかりしを賀状書く　薫風子
不義理した賀状早々わびて来る　舟遊
芋判の寅が笑っている賀状　葉平
白たびはぬかるみ道をしずしずと　慎太郎
長靴がいるぬかるみに慣れて朝すゝむ　傾しゃした政治に触れる仕舞風呂　六竜子
湯を浴びて戻れればチャンと燗が出来　清風
銭湯でちょっぴりよその子を叱り　菁風
夫婦相談の上で子供は二人産む　牧人
身上相談俺のどこかに似た境遇　呂人
投げだして再起ほかれと云うも居り　生薑
再起々々と不義理を重ね　活石
ワイシャツの白さ再起は寡黙なり　冬樹
奥さんをどうするかねとず訊かれ　梅志

川雑 京都支部句会（京都市）

田中烏雀報

和気あいあいとは一ぱいを飲んだ時　親生
和すものが雲とは淋し煙草はく　極堂
目尻相和してめでたい話　司郎
かしわ手を打てば瑞気が湧いてくる　烏雀
森羅万象瑞気に映える初日出　和三郎
病む人に似て水仙の首細く　生薑
いけて水仙の花言葉は知らず　ゆきら
水仙右向き左向き噎の少女居る　あきら
同棲の話をポストへ今日落とす　礫
同棲の匂いを受ける洗濯屋　紫蘭

川雑 弓削支部句会（岡山県）

直原七面山報

善人になりたく腹の虫押さう　たつよ
認承式すめば漫画の筆が待ち　杏郎
自然増収そんないい薬ないかいな　生薑
家計簿へ黒字が出来た笑い声　仙人坊
皇太子夫妻へ投手のファイト燃え　知恵美
この池で釣るなと書いてから釣られ　要人
ツバメ持つ化粧ひときわ厚く塗り　二郎
大臣のミスをマンガは見のがさず　三四郎
病む母を慕うて泣く子になやまされ　乃夢
パンティをずらして注射針を待ち　竜平
母と娘の意見が違うリバイバル　しおり
ほろほろと袖に萩みる秋の道　周甫
焼いもは食べたし肥りたくなし　遠山
一粒ですぐ効きそうな効能書　崇世
お互に道をゆずってすくみ合い　算馬
胃の悪い患者もせらう夜食会　三太郎
ねり鑑で母の涙が眼に浮び　甚六
ここからが色街酔うた足になり　七面山

川雑 備前支部句会（岡山県）

横山一声報

斗志あるんかいなもぐもぐガム噛んで　芳月
ささやかな斗志は横を向いたまま　博
病室でもやす斗志はたかが知れ　秋月
しらじらとお世辞もいえる年になり　滴水
すずなりの柿さえ惜しくなるお世辞　宗義
おばあちゃんのお世辞に孫の口答え　良子
借金を払いやお世辞をつりにくれ　東岸
変骨へお世辞を言うて叱られる　一声
ふるさとの紅葉へ母を旅立たせ　胡風
旅をして米の出来ばえ比べて来　あやめ
旅の宿解放感が酔い潰れ　昭路
でぼちんを打った柱をにらみつけ　伊久野
三代の屋台支えている柱　万女
電柱のビラが呼んでる歳の市　道雄
柱だけ建てて建初め雨にぬれ　草二
犯人にされて故郷が遠くなり　賤女
犯人に無賃で一夜を貸す地蔵　称子
スキ焼の匂いへサンマで対抗し　三六
仲人がお世辞上手に話かけ　竜泉

川雑 米子支部句会（米子市）

小西雄々報

声量を落し生活の裏話　吾柳
ちっぽけな歩みとさとる十二月　天邪鬼
一円で福を招きに初詣　青香
光陰はいよいよ早し齢の数　素瓢
金のことで行くのではなし初詣　一札
木枯と根くらべして母は掃き　一保
出世する早さへ敵の数もふえ　詩郎
ノーチップ女一向振り向かず　無閑
一本の抜毛も惜しい六十才　鶴丸
魚屋で鯛から先きに値段きき　さだ
添寝の子昔話を承知せず　玲子

胃と風邪の薬で多忙な十二月　秀峰
リバイバル右翼も負けずクーデター　徂宣
忙がしい和尚法事の梯子酒　怖堂
大鯛をにらんで小鯵買ってくる　節枝

雑川 土佐支部句会（高知市）

川竹松風報

苦労したかげも見せない世話女房　大介
だまって帰ったを女気に入らず　白梅
出張の三日を彼女寂しくし　小百合
羽子板へ袂が重い新春の庭　五郎
今年又僕は初日へよう起きず　寛
満塁へうしろ手でマッチ貸してやり　酔雀
ライターの不調マッチの火を貰い　朝香
根気よくすってみるマッチ混ってる　はる江
玩具屋の前で強情坐り込み　古城
強情な奴だと云いつつ認めてい　誠水
強情が気に入り養子にする話　利子
白状をせぬ強情に茶をすすめ　勝子
強情なとこを買われた役がつき　三郎
強情を通して女泣いている　幸子
参観日母を見といて手を挙げる　一枝
人にもの委せてから老いはじめ　紅樹
八百長があるので競輪止められず　松風
職変えて気楽になった色話　康之介

川雑大鉄局支部 みなと句会（神戸市）

植村客遊子報

生活の余裕月賦で物が買え　白渓子
アパートの隅に巾とる鏡餅　初甫
地下足袋で稼いで悔いのない生活　杜的
拗る事にも妓等の打算的　客遊子
拗てみて顔色をみて寄りかかり　賀人
ボーナスの夢が生活ささえてる　由雄
生活の希望を分けて共かせぎ　惣太郎
新年になれば貯めると飲んでいる　宗悟
素通りも財布の底のあさい時　雷太
百人一首今年は末の子もとれる　万的
片ことも云えぬ内から拗て居り　恵甫
苦労人の伯父素通りもしてくれる　紅月
子沢山拗ている子は放っとかれ　美由起
正月の家風を古くとも守り　勢火
新年の挨拶ぬきで祝酒　千甫
竹の葉を鳴らす風あり片想い　水客

雑川 木次支部句会（島根県）

藤井明朗報

老いらくも出来て五体の若返り　清夢
老社長若返らした女秘書　清泉
ハネムーン無事に帰って市場籠　古坊
毒舌もなつかし無事な顔を見せ　明朗
朝星や夜星へ土も若返り　栄治
若返る気のコンパクト離されず　昌
商人の街若返るネオンの灯　迷調子

杏林川柳会（大阪市）

中島生々庵報

まだ土のつかぬ力士に汗にぎり　野迷路
うらぶれて暮れ正月のけじめなく　一哲
公は師弟のけじめつけておき　一伸
土俵去る今日勝たせたい老力士　小石
遺伝かも知れずけじめを知らぬ吾子　五十六
良妻賢母けじめはっきり使いわけ　生々庵

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

ケーブルで歩いた道を子に教え　まさる
ケーブルで帰る芸者の乗り合わせ　春巣
歳末にすられる人に拾う人　春雄
編棒が目数違えたええ話　没食子
あいつの喉ねらう衝動毛糸針　風仙洞
親一人子ひとり世間に負けまいぞ　蕗児
母子寮に育ち年下に泣かされる　草右
大会社社長を知らぬ平で居る　ハナ子
白足袋の社長で京に老舗もち　愛論
私は妻です妓をいくら囲うとも　宏子
妻の座を乗取る二号のかまえにて　竹青
四十年無口で通した妻の座よ　幸男
だまされてだまされて妻の座をまもり　路郎

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

山だけで死せる画家ありうらやまし　狂史
厚着して賢妻いよいよ老いにけり　瑛巳
賢妻もヤンチャな坊やにお手を上げ　昭一
賢妻程二号のあるのも気がつかず　義広
画家の天分か色つきの夢を見る　留鈍
婦人会会長主人の細りよう　ほたる
賢妻の重荷にたえて色あせぬ　節子
画家ですと言わんばかりのベレー帽　柳波
売れる絵はかきたくないとはよく云った　理休

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

鍵は皆私に縁が遠おます　勇三
鍵穴へ映る女の生活譜　六竜子
錠前も古風見事な文化財　紅月
父社長鍵のまかせぬ子に育ち　摩天郎
若息子親の川柳に無関心　カズヱ
よろめいているのにパパは無関心　美代
ポスターに誘われてきた行楽組　呂人
ポスターのヌードが人気よぶ映画　きはち
ポスターの上にポスター貼って去に　凡太
火の用心のポスター残る火事現場　周一
髭はやしたはるポスターのお富士さん　八郎
ボーナスをねらうポスターターミナル　とも子
生酔は駅のポスターで靴をふき　東雲楼
ポスターになった娘は親泣かせ　正倫
歳末やおおた子にひかす当りくじ　阪口
年末も年始も同じ顔で生き　吉太郎
歳末と言うのに釣で日を過し　静林庵

雑川 婦人友の会（大阪市）

中島小石居

あばら家をカムフラージュする花を活け　一栄
本堂に座し心臓の音を聞く　清子
スタートの騎手圧力をふと思い　阿茶
花活けてだれか尋ねて来そうなり　操子
スタートへみな勝たせたい豆選手　小石
展示会芦屋マダムのキャデラック　〆女
本堂へ喪服の黒が似合う人　春栄
サンプルの薬もまぜて処方をし　良子
水仙が一輪しくじった目に涼し　章子
出発も終りも酒に身をくずし　きさ子
本堂の如来はとうに身売りされ　俊江
本堂の手入れがとどく床のつや　奈良子
スタートでだだをこねてる馬もおり　美喜
展示会インスタントのものばかり　白美
展示会さかさのような絵も混り　由子

酌よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七
梅里の店　大萬
★大万川柳（第百三十三回）を募る
兼題「未練」　路郎先生選
締切・三月十五日　五句以内
発表・三月廿日　（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ一〇　大万川柳会宛

柳樽室

路郎生

★昼間はぽかぽかとあたたかいが、東京ではカゼが流行っているそうだ。東京都の人口の六割六百万人が流感にかかっていると新聞が報じている。

★富士野鞍馬氏の続稿が遅れているので、若しや流感ではないかと、案じていたら案のじょう六百万人の一人になっていられた。他の柳友たちも、どうかしらと案じている。京阪神でもそろそろお裾分けをうけている。私などなるべく外出を避けているが、句会などへ出かけるには必ずマスクを掛ける。

★近ごろは火事と交通殺人でぶっそうな世の中だ。出ないですむ人は出ないことである。こんな世にあって静かに句に親しめることはお互いに幸福だと云わねばならない。

★ハワイの視察から戻った若本多久志君が、前山北海君からのお土産だといって昆布に鰊が産卵した珍品を届けてくれた。昆布に食っついた卵を一っしょに喰べると、やはり数の子の味だが、酒の肴としてなかなかしゃれたものだ。鰊がオホーツク海へ産卵にゆくまでに昆布へ産みつけたものでハワイにしかないとのこと、さすがにジャーナリスト北海だよと、おいしくいただいた。

★神戸の某氏から「川柳雑誌」へ投句を続けているが、いつも一句組だ。某誌へ投句すると四句も抜いてくれるがと、アンに緩選にしてもらいたいことをほのめかされたが、某誌は同人誌なので、多く載せねば雑誌を購読してくれませんと、幹部が告白しているのでも判るように四句も載せるのでしょうが、「川柳雑誌」は出来るだけいい句を載せて、社会に川柳の真価を認識してもらいたいために、厳選を続けているのであるから、その点をご諒解下さって、四句組でも五句組にでも抜けるように、作句に精進していただきたい。そしてそのレベルにまで到達した時に、振り返って、一句組の時の句をご覧になれば、むしろ厳選されたことをうれしく思われるに違いないと思う。多く抜けるよりレベルの高い一句の方がどれぐらいその作家を印象づけるかが判らないのであるから、一句組にインフェリオリティコンプレックスを持たないで一歩一歩努力を続けることである。多くの先輩は何れもその階段を登って来たのである。同人誌はその経営の立場上やむを得ず緩選をされていられるのであろうと思われるが、甘やかされるということほど作家にとって不幸なことはない。話は違うが、多く抜けさえすればいいと云う方は日本棋院のかすり組の初段と、旦那芸の初段との格差を考えて見る必要があるのではなかろうか。どうか、わが社の意のあるところを汲んで一流作家を目指して作句をされたい。十年経ってもザル碁党の域を脱し得ないでは年輪が泣くというもの、年輪は年輪だけの光を発してもらいたいために敢えて苦言を呈することにした。

★では諸君の健吟を祈ってペンを擱く。

▼ペンの散歩▲

▼前号は好評だった。執筆者諸氏のおかげである。

▼さて、ここで考えさせられるのは、ぼくが編集部の末席をけがしてから、もう六年になるが、まだ新人の執筆陣がそうたくさん伸びてこないことだ。いつまでも大家におんぶしてもらってノホホンとしているのではどうかとおもう。奮起してほしいものだ。こんどの芥川賞作家は大江、石原につづいて学生作家だった。

▼宇宙競争はグレン衛星の成功でマーキュリーがウォストークにやっと追いついたようだ。10回に及ぶ延長など、すべてが開放的だったことは快適なニュースだった。

▼水谷竹荘氏の好評読みもの「続川柳料理暦」が本号でおわった。ながい間の執筆はご苦労だった。

（一三夫）

三月句会―川雑支部

★淀川句会・5日（月）六時、題録音・道づれ・リーダー、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、**★玉造句会**・10日（土）七時、題、のんき・目覚め・うぬぼれ、所、市電玉造南百米、大阪信用金庫、**★阿倍野句会**・20日（火）七時、題、寄り道・甘党・荷物・赤字、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万、**★南海電鉄句会**・15日（木）六時半、題、催し物・魅力・着心地、所、難波高架下親和クラブ、**★にしなり句会**・18日（日）六時、題、王妃・桃の花・道、所、玉出新町通り一ノ一一後藤梅志居、**★宇部句会**・4日（日）一時、題、目的・援助・ビニール・要領、所、津秋六花居、**★京都句会**・16日（金）夕、題、口笛・地味・速達、所、四条縄手仲源寺、**★みなと句会**・26日（月）六時、題、魅力・ゼロ・芽所、神戸鉄道クラブ日本間、**★明和研究句会**・11日（日）1時、題癖・陽気・蒲公英、所、阪神電車鳴尾駅東南二百米鳴尾公氏館。

麻生路郎著　好評噴々

川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというからがなかなかうまい。川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。句の方より実はその鑑賞文の方が面白いくらいで、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇一八
振替口座　大阪　七五〇五〇

著本多久志著　麻生路郎序

川柳
親ごころ子心

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

風流
人間横丁

東野大八著

B6型　二五八頁
価 250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

詩川柳考

高鷲亜鈍著

B6判函入
価 380円
送費90円

★著者は曽て剛生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

発行所　大阪市住吉区内 万代西5丁目25　川柳雑誌社　振替口座大阪75050　電話 大阪 (67) 6081

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

募集

課題吟募集

初産（十句以内）　菊沢小松園選
縄路（十句以内）　長野井蛙選
手さぐり（十句以内）　本多柳志選
（二月十五日締切）

片隅（十句以内）　浜田久米雄選
わくはぐ（十句以内）　真鍋一瓢選
年がい（十句以内）　中村九呂平選
（四月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠十句以内）　麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）　北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）　麻生路郎選
（毎月十五日締切）

投稿規定

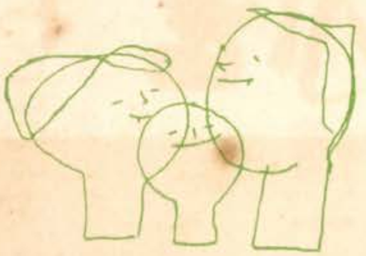
▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「評瀬吟」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B判5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第三十七年第三号
定価九〇円（送料六円）
半ヵ年　五七六円（〒共）
一ヵ年　一、〇八〇円（〒共）
（禁転載）
昭和三十七年二月廿五日印刷
昭和三十七年三月一日発行
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(67)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

川柳雑誌　37年3月号通巻第418号　創刊正大十三年

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬萊

大阪なんば・TEL (641) 551－2

パンを入れると
スイッチが入り
焼き上ると
パンが飛び出る

完全自動トースター

SK-111型 現金正価 2,400円

SANYO
サンヨートースター
三洋電機株式会社

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価　二五〇円
送費　七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂
東京都新宿区払方町27　振替東京29507

ホテル　白浜温泉　平草原
パシフイック
TEL 白浜温泉733 大阪案内所 (631)0221

白浜口ゆき　直通列車
特2きのくに……………毎日　なんば発 12.37
週末準急くろしお 土曜ごと　〃　13.10
新宮ゆき　直通列車
なんき1号……………毎日　なんば発 8.10
夜行直通……………〃　〃 22.07

のりば大阪なんば　南海電車

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅七年三月一日発行（毎月一回一日発行）　編集　麻生幸
発行印刷人　麻生幸二郎　発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪(67)一六〇八一　振替口座大阪七五〇五〇
定価九十円（送料六円）